

# 自治医科大学看護学部年報

Jichi Medical School Annual Report of Nursing

第 2 号



2004

## 目 次

### ○ 特別報告

“看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標”に続くもの  
—文部科学、厚生労働両省におかれた看護に関する委員会報告等を読む—

学部長 野口美和子 …… 3

欧州3カ国ピアカウンセリング研修旅行記

健康教育学教授 高村 寿子 …… 11

### ○ 委員会等報告

|            |           |       |
|------------|-----------|-------|
| 人事委員会      | 委員長 野口美和子 | …… 19 |
| 教務委員会      | 委員長 塚越フミエ | …… 19 |
| 学生委員会      | 委員長 高村 寿子 | …… 20 |
| FD・評価実施委員会 | 委員長 野口美和子 | …… 21 |
| 紀要年報編集委員会  | 委員長 渡邊 亮一 | …… 22 |
| 予算委員会      | 委員長 野口美和子 | …… 22 |
| 図書館運営委員会   | 委員 永井 優子  | …… 23 |
| 保健委員会      | 委員 永井 優子  | …… 24 |
| 臨床指導者研修会   | 担当 成田 伸   | …… 24 |

### ○ 教育研究分野別報告

|       |       |
|-------|-------|
| 学部長   | …… 27 |
| 一般基礎  | …… 27 |
| 専門基礎  | …… 29 |
| 基礎看護学 | …… 31 |
| 地域看護学 | …… 32 |
| 精神看護学 | …… 35 |
| 母性看護学 | …… 37 |
| 小児看護学 | …… 40 |
| 成人看護学 | …… 40 |
| 老年看護学 | …… 41 |

○ 研究業績録

|             |    |
|-------------|----|
| 学部長 .....   | 45 |
| 一般基礎 .....  | 46 |
| 専門基礎 .....  | 47 |
| 基礎看護学 ..... | 48 |
| 地域看護学 ..... | 49 |
| 精神看護学 ..... | 50 |
| 母性看護学 ..... | 51 |
| 小児看護学 ..... | 53 |
| 成人看護学 ..... | 53 |
| 老年看護学 ..... | 56 |

○ 資 料

|                        |    |
|------------------------|----|
| 2003年度（平成15年度）年譜 ..... | 61 |
| 自治医科大学看護学部の概況 .....    | 61 |
| 教職員名簿 .....            | 62 |

## 特別報告

# “看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標”に続くもの —文部科学、厚生労働両省におかれた看護に関する委員会報告等を読む—

学部長 野 口 美和子

## 1. それは人確法から始まった

平成16年3月26日，“看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標”（以下、「卒業時の到達目標」という）が出された。これは、文部科学省に設置された“看護学教育のあり方に関する検討会”によりまとめられた報告書である。この報告書の冒頭では、

わが国の学士課程における看護学教育は、昭和27年（1952年）にスタートした。その後、大学数は遅々として増加しなかったが、平成4年（1992年）の「看護師等の人材確保の促進に関する法律」の施行、並びに「看護婦等の確保を促進するための措置に関する基本的な指針」の策定を契機に、看護系大学は急激に増加しはじめた。平成3年に11校だった看護系大学は、平成15年現在107校にのぼっている。

と述べられている。

看護師等の人材確保の促進に関する法律（以下、「人確法」という）では、制定の目的を、

この法律は、我が国における急速な高齢化の進展及び保健医療を取り巻く環境の変化等に伴い、看護師等の確保の重要性が著しく増大していることにかんがみ、看護師等の確保を促進するための措置に関する基本指針を定めるとともに、看護師等の養成、処遇の改善、資質の向上、就業の促進等を深めることに配慮しつつ図るための措置を講ずることにより、病院等、看護を受ける者の居宅等看護が提供される場所に、高度な専門知識と技能を有する看護師等を確保し、もって国民の保健医療の向上に資することを目的とする。

とし、また「看護婦等の確保を促進するための措置に関する基本的な指針」（以下、「指針」という）では、“望ましい看護のあり方に普及に向けて”の項目を設け、看護系大学・大学院の整備充実について、

近年の医学・医療の進歩・発展に伴う高度化・専門分化等に十分対応し得る看護の専門的知識・技術と豊かな人間性や的確な判断力を有

する資質の高い看護婦等を大学において養成することが社会的に要請されている。

また、看護婦等学校養成所の看護教育の充実のためには、これらの学校養成所の教員としてふさわしい資質を備えた優秀な人材を確保する必要がある、その基盤となる看護系大学（学部、学科を含む。以下同じ。）の整備が課題となっている。

このため、看護教育の充実と教員等指導者の養成を図る観点から、看護系大学の整備充実を一層推進していく必要がある。

さらに、看護系大学の整備充実に伴い、今後、ますます必要とされる大学等の教員や研究者の養成を図るため、看護系大学院の整備充実に努めることが必要である。

と述べている。これにより看護系大学・大学院の開設のための環境が整えられ、順調に伸びた。平成16年度現在、看護系大学は119校、大学院修士課程は73校、大学院博士課程は25校となっている。

## 2. 生涯学習の出発点としての看護学基礎教育について

「卒業時の到達目標」では、学士課程における看護学教育の特質として、

1. 保健師・助産師・看護師に共通した看護学の基礎を培う課程であること
2. 看護生涯学習の出発点となる基礎能力を培う課程であること
3. 創造的に開発しながら行う体験学習が中核となる課程であること
4. 人間関係形成過程を伴う体験学習が中核となる課程であること
5. 教養教育が基盤に位置づけられた課程であること

を示した。そして、検討会における検討の趣旨として、なぜ今、“看護実践能力の卒業時到達目標”を取り上げるのか、その理由について、

第一次検討会（看護実践能力育成という観点から教育内容のコアを示し、併せて臨地実習指

導体制や教育の質向上のための組織づくりを提言した)を受け、各看護系大学では、より効果的な看護実践能力の育成のため、臨地実習の充実など、様々な改善が積極的に行われている。看護系大学の卒業者には、国家資格を有した看護職者として社会に出るという性質上、卒業時点である一定の看護実践能力を備えていることが求められる。しかしながら、看護実践能力は、学士課程卒業時に完成するものではなく、生涯にわたり向上するものである。したがって、本報告で示される卒業時の到達目標は、卒業後の成長を保证するために、学士課程において修得しなければならない基本的な看護実践能力であり、卒業者が、その後自ら研鑽することで初めて意味をなすものである。

と述べている。この表現に接したとき、私はひとつの図とぴったり重ねて読んでいた。看護教員としての実証すべき目標として、私を支えて来たと言っても過言ではない一つの図である(図1)。それは、古い小さな書籍(モイラ・アレン著、草刈淳子、伊藤幸子訳、看護教育プログラムの評価、日本看護協会出版会、1980年)でみつけた。

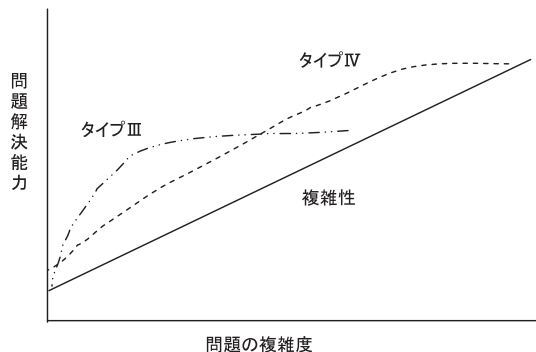


図1 患者状況の複雑度とタイプⅢ、タイプⅣ看護教授法で発展させる問題解決能力の関係モデル

私は、まだ十分に開発されたとはいいがたかったが、40年前に一応学士課程を卒業し、臨床看護婦となった。具体的な看護技術については、附属看護学校の3年生に教わらなければならないといった体験をしつつ、3年余りの臨床経験を経て、思いもかけず、看護学校の専任教員となり9年を過ごした。その後、短期大学の教員を経て、恩師の急死をうめるべく、大学の教員になった。

もともとこの図は仮説モデルで示されている。タイプⅢの看護教育とは、

教師は、次の項で述べるようなアプローチを用いて問題がよく理解されている患者の看護に焦点をあてて看護を教える。

タイプⅢの教授法において教師は学生に、観察すべきものは何か、観察事項の意味、その問題を解決するためのもっとも効果的な計画、そしてその計画が実行されるべき方法について指導する。学生は、どれだけ教師の設定した目標に近づいたか、またその特定な問題を処理するにあたって既知のアプローチと立証ずみの方法をいかに再現できるかにもとづいて評価される。学生は、既成の全体計画に予定されている特定の活動について知らされているか、またはすでに実施したことがある。学生は看護をどう展開していくか、問題は何かを予想し、自分自身のそれへの対応も予想している。すなわち学生たちは何を、どのように達成し、関係者(患者と看護婦)がいかに作用しあい、そして患者にとってその結果はどうなるのかなどについて、きちんと立てられた計画をもっている。教師は、学生が見落としてしまった細かい事柄について学生に気づかせたり、またその経過をチェックしつづけるため、さらに計画の実行を見届け、必要なら援助するために介入する。ついで学生が自分で実施し、看護技術をマスターできるように、似たような問題を課題として学生に与え、学生を訓練する。学生は、すでに特定な状況のもので患者を看護することを学んでいるので、指導の必要性は少なくなっている。

タイプⅣの看護教育とは、

教師は、次項で述べるようなアプローチを使って、問題がさほどよく知られておらず、理解もされていない患者の看護を学生に教える。

教師は問題の知られている度合いはさまざまであり、特に患者一家族状況における問題というものは最初からすべてを知ることはできないと考えている。

タイプⅣの教授では、学生は観察し、情報を集め、教師と学生はその観察事項を検討し、そして学生はそれらの意味を考える。教師は、ある情報と他の情報との関係を明らかにするために、さらにその根拠となる情報を求めるかもしれない。学生の論拠では説明できない事柄については、その根拠となるものを考慮させたり、あるいは学生がしているはずの、あるいはなす

ことができるはずの、さらに関連した観察をひき出すために尋ねてもよい。こうしているうちに学生は、あるアセスメントに達し、問題の優先順位をきめ、自分が得た情報と観察においてかけている部分を認め、修正する。学生はそのアセスメントと看護計画について指導者と話し合い、そして適切な手技と器械操作能力がそなわっていれば、適切に患者に対応できるように努力する。いいかえれば看護計画は患者の変化に応じて発展していく。指導者はここというときに介入して、学生がまだ学習していない適切な方法やアプローチを実際に実施してみせる。

私は、様々な教育理論を読みあさって、この仮説モデルを理解した。“あとで伸びる基礎教育”をしようと考え、そして大学における指導のあり方としてタイプⅣの指導をするよう努力してきた。

それまでの私の経験からは、どう考えても看護学校の卒業生の方が仕事ができ、特に附属看護学校の卒業生は何でもよく知り、やり方を心得ており、すぐ役立つのは明らかだった。それに比べ、私を含めて、大学の卒業生はどうもひよわだ。それでも1年もすれば堂々と仕事をこなし、“とてもしっかりしているね。”といった評判をとる者もあり、かの図の示す意味を私に確信させてくれた。しかし、その多くは、急激に開設される看護系大学・大学院の教員に招聘されていき、現場を変える力を発揮できなかった。

“あとで伸びる基礎教育”これを証明したいと考えて、いくつかの調査（千葉大学看護学部研究班：木村財団看護教育振興財団助成調査報告書「21世紀に求められる看護大学のあり方」、学士課程卒業看護職の就業状況と看護管理者の期待（分担代表 平山朝子）、本学卒業生の病院就業・活動状況（分担代表 佐藤禮子）、大学卒看護職の就職病院における生涯学習に関する調査（分担代表 野口美和子）、平成9年（1997年））も行ったが、明確にはできなかった。しかし、よく考えてみると、この図が成立するには、卒業生の働く現場において複雑な問題解決を必要とすべく看護活動が求められていることが前提になる。看護婦は病院という一定の環境で、看護基準をつくり、それにそって業務をこなすことだけが求められ、あまり複雑な問題解決を必要としないところでは、タイプⅣの教育を受けたとしても、力を発揮することが求められず、伸びようがない。現場の問題や矛

盾が見えてしまう分、“理屈が先行して…”というマイナス評価を受けてしまうことになりかねない。

### 3. 21世紀の看護ケア提供モデル

しかし、時代はどんどん変化し、高齢化社会に突入した。そして、日本は世界最高水準の高齢化率となることが見込まれている。疾病構造も急性疾患中心から、慢性疾患へと変化している。医療技術もまた高度化している。これをうけ、患者の生命の維持のみでなく、その生き方にそってQOLの向上を目指す時代になった。医療では、在宅医療・予防的医療へシフトすることが目指され、患者の参加とともに看護職の教育的支援的活動が欠かせなくなっている。

このような時代にあって、タイプⅣの基礎教育に努力するだけでは看護教員として十分ではない。人材育成と看護活動の改革とを一体的に捉えていく必要がある。そのために人材育成を生涯学習に含めて考え、専門職にふさわしい看護学教育観を持つことが求められる。

平成12年（2000年）2月20日、日本の全看護大学を組織している日本看護系大学協議会は、「21世紀に求められる看護学教育—高度な看護実践の実現に向けて—」を公式のステートメントとして世に問うた。平成4年の“人確法”からすでに8年、看護系大学学士課程は74校、大学院修士課程は31校、博士課程は9校となっていた。ステートメントは、日本看護系大学協議会の学長・学部長会議によってまとめられたもので、“21世紀のヘルスケアの課題と看護職”、“看護職の教育の現状”、“21世紀の看護職養成の基本的考え方と4大卒マンパワー”、“21世紀の看護系大学のあり方”の4章からなっている。

第3章“21世紀の看護職養成の基本的考え方と4大卒マンパワー”の中では、“看護系4年制大学卒看護職マンパワー試算”が試みられている。私は、厚生省看護課長として“人確法”を生み、その後退職し、静岡県立看護大学の学長となった矢野正子氏とともにその試算の下案づくりにあたった。

試算は、平成15年（2003年）までに4年制大学課程105校を、その4年後の平成19年までには62の修士課程の開設を見込んだ。また、医療機関等の数については、老人保健法等により2000年以降の

目標値が設定されているものについては、その数値を用い、それ以降については現有施設数を見込んだ。看護婦数については、老人保健法関連の目標値、または現有職員数を用いた。そして、試算に当たっての看護職員数の基本的な考え方は、

少子・高齢化社会となる日本の社会では、在宅ケアへの要請が高まることが考えられる。在宅ケアの場では、主に療養にかかわる看護婦の機能と、健康づくりにかかわる保健婦または助産婦の機能が合わせて求められる。加えて、ますます多様化する国民のニーズに応えるためには、看護系大学が行っているような看護婦教育と保健婦または助産婦教育を統合する一貫教育こそ必要になる。

また医療の現場に注目した場合、臓器移植など次々に新しい高度医療が開発されていく。そのなかで、患者が疾病を受容し、生涯にわたるセルフケアを行うなど主体的に参加できるように、患者および家族を支える看護の開発研究が必要である。このような社会の変化に対応して、高度な看護実践を維持し、実現していくには、看護職の生涯学習が必要となる。加えて、一人一人の国民が21世紀に予想される生活形態の変化に対応して、健康を維持し、自己実現を果たすために、看護職には高度な教育的機能が求められる。そのためには看護系大学における総合的看護基礎教育の上に、大学院教育によって専門的な実践能力を養う必要がある。

とし、21世紀の看護ケア提供モデルの考え方として、

わが国の看護教育制度はきわめて複雑であるが、看護婦免許は、基礎となる教育体系のいかんを問わず国家試験合格の条件さえあれば付与されることになっている。このような実態であるが、社会通念に照らして考えるならば、看護職としての資格をうるためにわが国看護婦養成の制度上最長4年間にわたる大学教育を受けた看護職こそ、その受けた教育にみあった責務を果たすべきである。すなわち、看護のあらゆる実践現場で指導的役割を担い、看護の質の向上に積極的に貢献する機能を果たすべきである。

と考えた。そして、20年後の2020年(2005年から15年後)を想定して、看護ケア提供モデルを構想した。

1) 看護施設(看護職が看護サービスを提供する施設をこの報告書では便宜的に看護施設と呼ぶ。医療機関、老人保健施設および福祉施設を含む。)

(1) 病院においては、病棟婦長以上の管理職(看護部長、副看護部長、病棟婦長)はすべて4大卒看護職とする。看護部長と副看護部長のうち、研究教育担当は大学院修了者とする。

(2) 特定機能病院においては、病棟看護スタッフの10%を4大卒看護職とし、さらに専門外来看護職および特殊診療室管理者にも4大卒看護職を充てる。看護部長、副看護部長、各看護単位の指導者は、大学院修了者とする。

一般病院については、1施設に少なくとも1人の大学院修了者を配置するものとする。

(3) 診療所は有床では少なくとも1人、無床では4大卒看護管理者を必要とする施設10%を見込む。

(4) 老人保健施設および特別養護老人ホームは、看護部長と副看護部長に4大卒看護職を充てる。老人保健施設、特別養護老人ホーム、老人病院について、各施設に少なくとも1人の大学院修了者を置く。

2) 地域ケア

(1) 在宅介護支援センター、特別養護老人ホーム、老人福祉センター、訪問看護ステーションにはそれぞれ看護責任者として大学院修了者をおく。

(2) 保健所には、人口4,000人につき1人の看護職(保健婦)を配置するものとし、全員4大卒看護職とする。

保健所のうち、県・政令保健所については、看護管理者はすべて大学院修了者とする。

(3) 学校・企業については、以下の通りとする。

①各都道府県教育委員会に最低1人の4大卒看護職を配置するものとし、すべて大学院修了者とする。

②企業は労働安全衛生法に基づき保健部をおき保健指導にあたる職員を配置する必要があるが、ここではその数として平成9年度就業者実数を算入する。

3) 行政・教育・研究

(1) 国・自治体の各行政単位ごとに行政担当者すべてを4大卒看護職と見込む。うち、国および都道府県の看護行政責任者・担当者各1人は

大学院修了者とする。

(2) 看護職養成施設(教育研究機関を含む)

①大学：1大学あたり4大卒看護職平均30人とし、すべて大学院修了者とする。

②短期大学：1大学同上15人とし、すべて大学院修了者とする。

③専門学校：1校同上3～4人とし、そのうち少なくとも1人は大学院修了者とする。

④保健婦・助産婦養成所：1校同上1人とし、すべて大学院修了者とする。

を示した。はたして15年後、これが実現されているだろうか？看護系の学士課程数と修士・博士課程数は、この時に立てた予想よりはるかに多く開設されているのであるが…。

#### 4. 望ましい看護のあり方の普及に向けて

「人確法」から10年たった平成14年(2000年)、厚生労働省内に「新たな看護のあり方に関する検討会」が設置され、平成15年(2003年)に最終報告書がまとめられた。報告書を読むと、“看護をめぐる現状と課題”のなかでは、

患者の生活の質を向上させるための療養上の世話に関する判断と実践については、教育の現場では、看護基礎教育におけるカリキュラムの大半を占めており、看護判断により適切なケアが行えるよう、重点的な教育が行われている。それにもかかわらず、医療現場においては、看護師の判断を生かした適切なケアが行われているとは、必ずしもいえない実情もある。

特に病院内における看護の実情を見ると、診療の補助のみならず、療養上の世話についても、看護師の側から医師の指示を求めているという状況もある。これは、法律や医師による要請があるというわけではなく、むしろ、単なる慣習として行われていたり、看護師等の役割や責任についての認識の不足など様々な背景があると考えられる。

と述べられている。

“時代の要請に応じた看護のあり方、医師等との連携のあり方”のなかには、

看護師等は、患者の生活の質の向上を目指し、療養生活支援の専門家として、その知識・技能を高め、的確な看護判断を行い、適切な看護技術を提供していくことが求められている。特に、慢性疾患の患者や高齢者の増加を踏まえると、

従来以上に患者の自己回復力を引き出し、支える働きかけや合併症等を予防するためのかわりを強化することなどの必要性が高まっている。

在宅で療養中の患者をはじめとして、患者の生活の質の向上を図るためのケアを迅速かつ適切に提供するという観点からは、医師と看護師等の十分な連携と信頼関係の下で、患者に起こりうる病態の変化にも対応可能な医師の指示に基づき、看護師等が適切な観察と看護判断を行い、患者に対して適切な看護を行うことが望ましいと考えられる。

この場合、看護師等は、その後の患者の状態についての観察結果や看護の立場からの判断を医師等に適切に伝え、より良いケアを行っていくことが必要である。

と記載されている。

そして、“望ましい看護のあり方の普及にむけて”では、

看護職の養成については、適切な臨地実習を行うための条件整備を進めるとともに、さらに、到達すべき看護技術教育の内容と範囲を明確にしていくことが必要である。

また、看護師等として学ぶべき知識・技術の増大とあわせて、看護師の資質の向上が求められていることから、看護基礎教育の内容を充実するとともに、大学教育の拡大など看護基礎教育の期間を延長していくことも検討していく必要がある。

卒後の教育研修についても、更に充実し、専門性を高めていくことが必要であり、技術研修をどのように取り入れていくか、制度化を含めて検討することが課題である。

また、特定の看護領域について、より専門的な教育・研修を受けた専門性の高い看護師等の養成の強化や普及を図り、その能力が積極的に活用されるような基盤づくりを行っていくことも重要である。

と述べられている。これを受けて、専修学校である看護学校の年限について検討されている。また、卒後研修については、まず助産師から試みられるかもしれない。“より専門的な教育・研修を受けた専門性の高い看護師等”として専門看護師と認定看護師、そして研修をうけた看護管理者の養成が今後ますます強化されよう。

より専門的な教育・研修として看護系大学に求

められるのは大学院教育である。平成4年の「指針」では、大学院については「看護系大学の整備充実に伴い、今後、ますます必要とされる大学等の教員や研究者の養成を図るため」看護系大学院

の整備充実に努めることが必要であるとしていた。事実、当時は、看護系大学の急速な増加に伴って、修士課程の修了生はその多くが、大学の教員に吸収されていた。しかし、平成8年に日本看護協会

表1 都道府県別専門看護師登録者数(平成16年11月1日現在)

| 県名     | がん看護 | 精神看護 | 地域看護 | 老人看護 | 小児看護 | 母性看護 | 成人看護(慢性) | 県別合計 |
|--------|------|------|------|------|------|------|----------|------|
| 北海道    |      |      |      |      |      |      |          |      |
| 青森     |      |      |      |      |      |      |          |      |
| 岩手     |      |      |      |      |      |      |          |      |
| 宮城     | 1    |      |      |      |      |      |          | 1    |
| 秋田     |      |      |      |      |      |      |          |      |
| 山形     |      |      |      |      |      |      |          |      |
| 福島     |      |      |      |      |      |      |          |      |
| 茨城     | 1    | 1    |      |      |      |      |          | 2    |
| 栃木     |      |      |      |      |      |      |          |      |
| 群馬     |      |      |      |      |      |      |          |      |
| 埼玉     |      |      |      |      |      |      |          |      |
| 千葉     | 1    |      | 1    |      |      |      |          | 2    |
| 東京     | 13   | 9    |      | 1    | 4    |      |          | 27   |
| 神奈川    | 13   | 6    |      |      | 4    |      | 1        | 24   |
| 山梨     |      |      |      |      |      |      |          |      |
| 長野     |      |      |      |      |      |      |          |      |
| 新潟     |      |      |      |      |      |      |          |      |
| 富山     |      |      |      |      |      |      |          |      |
| 石川     |      |      |      |      |      |      |          |      |
| 福井     |      | 1    |      |      |      |      |          | 1    |
| 静岡     | 3    |      |      |      |      |      |          | 3    |
| 岐阜     |      |      |      |      |      |      |          |      |
| 愛知     |      |      |      |      | 1    |      |          | 1    |
| 三重     |      | 1    |      |      |      |      |          | 1    |
| 滋賀     |      |      |      | 1    |      |      | 1        | 2    |
| 京都     |      |      |      |      |      |      |          |      |
| 大阪     | 7    | 1    |      |      |      | 1    | 1        | 10   |
| 兵庫     | 2    | 3    |      | 1    | 1    | 2    | 1        | 10   |
| 奈良     |      |      |      |      |      |      |          |      |
| 和歌山    | 1    | 1    |      |      |      |      |          | 2    |
| 鳥取     |      |      |      |      |      |      |          |      |
| 島根     |      |      |      | 1    |      |      |          | 1    |
| 岡山     |      |      |      |      |      | 1    |          | 1    |
| 広島     |      |      | 1    |      |      |      |          | 1    |
| 山口     |      |      |      |      |      |      |          |      |
| 徳島     |      |      |      |      |      |      |          |      |
| 香川     |      |      |      |      |      |      |          |      |
| 愛媛     |      |      |      |      |      |      |          |      |
| 高知     | 2    |      | 1    | 1    | 1    |      |          | 5    |
| 福岡     |      |      |      |      |      |      |          |      |
| 佐賀     |      |      |      | 1    |      |      |          | 1    |
| 長崎     |      |      |      |      |      |      |          |      |
| 熊本     |      | 1    |      |      |      |      |          | 1    |
| 大分     |      |      |      |      |      |      |          |      |
| 宮崎     |      |      |      |      |      |      |          |      |
| 鹿児島    |      |      |      |      |      |      |          |      |
| 沖縄     |      | 1    |      |      |      |      |          | 1    |
| 国外(英国) |      |      |      |      | 1    |      |          | 1    |
| 分野別合計  | 44   | 25   | 3    | 6    | 12   | 4    | 4        | 98   |

日本看護協会ホームページより(一部改変)

がその制度を確立してから、平成16年(2004年)現在、専門看護師は98人で、専門看護師が活動していない県は27県で半数以上あり、いまだ東京・神奈川に集中している状況である(表1)。認定看護師については、ゼロの県はないが、やはり東京・神奈川に集中・偏在している。つまり、高度な看護の提供からみたとき、いまだ“へき地”が多いのである。

### 5. 「卒業時の到達目標」につづくもの

「卒業時の到達目標」では、各看護系大学が、それぞれの理念にもとづいて特徴あるカリキュラムを発展させていけるように、どのようなカリキュラムであっても目指されるべき看護実践能力を整理して示した。各校は今後、これを念頭に、学生に育成された看護実践能力を点検することで、その教育活動を点検し、改革・向上させていくことになる。今後の課題は、「卒業時の到達目標」を念頭に、また生涯学習につながることを念頭に、教育を充実させることが求められる。

これら看護実践能力が、卒業後、どのように求められ、どのように開発されていくか見通しの上に立った基礎教育を充実させることが必要である。それには、大学院教育、より専門的な研修も大切であるが、看護職が専門職であるからには、能力開発における自主性がまず求められよう。

看護学教育では、臨地実習がその教育方法として重要である。その意味は、看護実践能力を支える判断力、技術を身につけることにあるが、それ以上に“看護とは何か”の理解を深め、確かめることにある。これが卒業後の能力開発の方向を定め、これにより自己教育へのエネルギーを得るのである。だから実習指導は、これからの看護学を理解し、患者のニーズに応じて看護を改善するための努力、すなわち、いまだよくわかっていないケアを求める努力を、自らしている看護の指導者・研究者によって指導される必要がある。大学の専任教員、さらにこれから導入されていくであろう“臨床教授”も含めて、教員の資質が問われる。「卒業時の到達目標」にそった教員の自己点検評価、能力の自己開発のためのシステムを確立することが必要である。

次に、現場の看護活動の向上が求められる。“新たな看護のあり方に関する検討会報告書”にもあるように、患者の生活の質の向上を目指し、

療養生活支援の専門家として、医師等と適切な連携のもとにその専門性、自律性を発揮することがこれからの看護職に求められている。看護の現場は、卒業生が、求められて自らを鍛え、その能力を発揮する場であると共に、学部4年間の専門職への出発点において、自己実現のイメージを想い描くところでもある。すなわち、学生の専門職としての人生に方向を与え、卒業生を鍛えてくれる看護現場の点検改善に参加し、住民のニーズを直に受けてひとりひとりのケアを創造していけるような新しい看護の場を開拓することは、看護系大学と教員の大切な役割であり、その教育活動を評価する上で重要な視点であると考ええる。

## 欧州3カ国ピアカウンセリング研修旅行記

健康教育学教授 高 村 寿 子

### 1. 研修旅行実現の経緯

栃木県は平成9年度から4年間10代の人口妊娠中絶率が全国1位であった。同時に性感染症罹患率も上昇傾向がみられ、思春期の人々に対して急遽何らかの対応を余儀なくされていた。そこで、栃木県保健福祉部では「栃木県思春期保健対策専門委員会」、栃木県教育委員会では「栃木県性教育検討委員会」を立ち上げて、検討を開始した。その結果、両委員会の共通の方策として、全国に先駆けて平成14年度からピア（仲間）カウンセリング（相談）手法を用いた高校生への性教育講座の実施を決定した。この方策は、厚生労働省が推進している「健やか親子21」の筆頭に掲げられている「思春期保健対策の強化と健康教育の推進」に該当するものであるため、厚生労働省からも補助を受けることができた。

まず県内の16歳から20歳までの高校生・大学生に対して、ピア（仲間）カウンセラーとしてボランティア活動を希望する者を公募することから事業は開始された。応募者は200名近い数となり、本学部1回生（現3年生）からも24名の学生が応募した。栃木県からこの活動のリーダーシップは本学看護学部の学生たちにとってほしいとの要請があり、応募した24名の学生は8月の集中講座まで待ちきれず、学内で自主的な事前学習をすすめた。

学習を進めていくうちに、諸外国では若者によるピアカウンセリング活動が積極的に行われ、効果を挙げていることを知り、それらの活動を視察・研修し、国際的な視野を広めたいと考えはじめた。そこで、英国にある若者活動の本拠：国際家族計画連盟（IPPF）に問い合わせたところ、スウェーデン・オランダおよびIPPFがあるイギリスの3カ国が候補国として推薦された。

同時に、学生たちはなるべく保護者に迷惑をかけないように、出発を1年後の平成15年9月中旬からとして、積み立てを開始した。以上、研修旅行を実施するに至った経緯を紹介した。

### 2. 研修先および訪問国

学生たちの自主的な研修旅行ということなので、

候補に上がった訪問国で何を学びたいか、そのためにどのような訪問先があるか、相談を受けた筆者は関係機関と連絡調整し、国際家族計画連盟（イギリス）、オランダ家族計画協会、スウェーデン性教育協会の訪問先を仮決定し、公文書を作成し、依頼した。

その結果、ピアカウンセラーとして養成された若者が、積み立てた自らの費用でこのような研修旅行を企画したことに対して、訪問先から「驚きと敬意とともにその候補場所に選ばれたことを名誉に思う。喜んでお受けしたい。」という快諾の回答が寄せられた。

その回答にさらに意欲を駆り立てられ、自分たちの活動をぜひ発表したいと英文で発表原稿を作成し、活動風景をふんだんに折り込んだパワーポイントを作成し、リハーサルを繰り返すなど準備を開始した。

また、イギリスが訪問国に決定したときから、自分たちの学びの原点である看護を創始したナイチンゲールの博物館『ナイチンゲール記念館』にぜひ行きたい、看護の心に触れたいと、瞳を輝かせて、夢を膨らませていた。最終的には、研修旅行は表1に示すような日程で実施された。

訪問先の選出、公文書依頼、通訳の選出などに、日本家族計画協会およびエイジェントの絶大なる支援と協力を得ることができた。このこともこの研修旅行が成功裏に終了した要因であった。

### 3. 研修成果

研修成果は、帰国後学生たちの手によって即座に整理され、関係機関紙に掲載され、全国の関係者および県内外のピアカウンセラーたちの士気を高めるのに貢献した。

以下に、学生たちがある機関紙に掲載した学びの一部を紹介する。この成果を身近で見聞していた2回生のピアカウンセラーたちは、「先輩に続け！！」と積み立てを開始した。

#### 3-1 オランダ家族計画協会（RN）

私たちのピアカウンセリング研修は、オランダ

家族計画協会 (RN) の訪問から始まった。ここで、私たち一行の世話をしてくれたのはトニーさんである。彼は「なぜ私たちがここを訪問したのか、日本で私たちがどんな活動を行っているのか。」ということに、とても関心を示していた。トニーさんは、性教育の国際的な組織・ネットワーク化に取り組んでいる。その活動内容は、高校生を対象とした性教育、高校生以外の世代を対象とした性教育、中央アジアをはじめとする発展途上国の地域支援等であり、いくつかの部門に分かれている。そして、これらの活動をどのように実践していくかが当面の課題であり、それには国際家族計画連盟 (IPPF) と連携をとりながら目標を達成していくことが重要であると説明してくれた。オランダ家族計画協会 (RN) では、主に①HIVグループのピア活動、②性感染症 (STI) 予防活動、③国内の思春期世代へのピア活動を行っている。

#### (1) HIVグループのピア活動

まず、スタッフの一人、フレッドさんによるHIV・同性愛のピア活動についての説明があった。彼は34歳で、ゲイであり、しかもHIV陽性であることを冒頭に私たちに明らかにした。日本ではあまり語られることのないゲイ・HIVに対する寛容度について、彼は「オランダではゲイは広く認められていて、普通である」と説明してくれた。ゲイは法律上平等で、差別が禁止され、結婚も認められている。とは言っても、やはり親など家族に明かすには大変な決意が必要だし、平等と言っても、ゲイを認める人たちと宗教的信念がある人たちとの間には、軋轢が生じていることも事実である。最近では、このゲイ・レズビアンに対しては寛容度が狭くなっているようである。フレッドさんは、同性愛の人たちが抱える全ての問題に対し、ヘルスグループを通して支援している。ここで気をつけなければならないことは、彼自身は報酬を得ているので、無報酬の方々には収益面も含めたピア活動の決定権を優先させているということである。

HIVについては、1996年以降よい治療法が開発され、そのおかげで1日1回の服薬だけで身体的には何とか生活できるということである。しかし、人間関係や子どもを持つことの困難などがあり、感情的には複雑で、心の中でHIVを受容して生きるということは、いろいろ難しい面もあるとのことであった。ゲイについては、一般的な平等意識

はあるが、HIVがあれば少し話は違うようである。昔は慈悲もあったが、今は逆に抑圧されてきているとのことである。ただし、会社では病気などの関連で、保険と損保は受けられているとのことであった。

#### (2) 性感染症 (STI) 予防活動、主として売春婦を対象としたピア教育

性感染症予防活動は主に2つのグループが行っている。一つは青年を対象としたグループで、もう一つは売春婦を対象としたグループである。

オランダでは売春が法的に行われ、売春婦の性感染症が深刻な問題となっている。私たちの意見を聞きながら議論を進めてくれたマレーイさんは、売春婦を対象としたグループの中で性感染症の健康教育に携わり、売春婦の中からピアエデュケーター (仲間教育者) を育てるという活動を行っている。

アムステルダムには約2千人の売春婦がおり、そのうち千人は外国人である。そのため、言葉や文化の違いにより、直接教育するのが難しい。また、不法入国者や非合法のドラッグ (薬) の使用者などもある。これら法律の枠を超えた売春婦に、マレーイさんたちが実際に接触することは簡単なことではない。

そこで考え出されたのが、ピアエデュケーターを売春婦の中から育てるということだそうである。まず、ピアエデュケーションができる売春婦を看護師が見つけ出し、彼女に教育を行う。性感染症や妊娠のメカニズムや避妊などの説明ができるようにするため、2日間のトレーニングによって、これらの教育スキル (技術) が身につくようにする。

ここで養成された売春婦たちは、現場に戻り、そこで仲間の売春婦たちにピアエデュケーションを行うのである。この活動を始めて10年経ってマレーイさんたちがわかったことは、医学的知識を得たいと思っている売春婦が大勢いるということだった。

#### (3) 国内の思春期世代へのピア活動を行う国際医学生連盟 (IFN)

思春期へのピア活動については、私たちが行っているピアカウンセラーに似た活動をしている国際医学生連盟 (IFN) に参加している女子医学生と交流することができた。

この連盟では、医学部の学生に思春期保健を刺

表1 欧州ピアカウンセリング研修旅行日程表

| 目次 | 月日 (曜)       | 都市名                                     | 時間                               | 交通機関                    | 日 程                                    | 宿泊ホテル   |
|----|--------------|-----------------------------------------|----------------------------------|-------------------------|----------------------------------------|---------|
| 1  | 9月18日<br>(木) | 東京 (成田) 発<br>ロンドン着<br>ロンドン発<br>アムステルダム着 | 10:25<br>15:10<br>16:00<br>18:10 | BA-006<br>BA-440<br>専用車 | 英国航空にてロンドン経由アムステルダムへ<br>到着後ホテルへ        | アムステルダム |
| 2  | 9月19日<br>(金) | アムステルダム                                 | 終日                               | 専用車                     | 現地機関訪問および研修                            | アムステルダム |
| 3  | 9月20日<br>(土) | アムステルダム発<br>ロンドン着                       | 14:50<br>15:00                   | 専用車<br>BA-435<br>専用車    | 市内観光後空港へ<br>空路ロンドンへ移動<br>到着後ホテルへ       | ロンドン    |
| 4  | 9月21日<br>(日) | ロンドン                                    | 午前<br>午後                         | 専用車                     | ロンドン市内観光<br>自由行動                       | ロンドン    |
| 5  | 9月22日<br>(月) | ロンドン<br>ロンドン発<br>ストックホルム着               | 16:00<br>18:10                   | 専用車<br>BA-440<br>専用車    | 現地機関訪問および研修<br>空路ストックホルムへ移動<br>到着後ホテルへ | ストックホルム |
| 6  | 9月23日<br>(火) | ストックホルム                                 | 終日                               | 専用車                     | 現地機関訪問および研修                            | ストックホルム |
| 7  | 9月24日<br>(水) | ストックホルム発<br>ロンドン発<br>ロンドン着              | 12:25<br>14:05<br>15:45          | BA-777<br>BA-007        | 英国航空にて帰国<br>ロンドン経由                     | 機内泊     |
| 8  | 9月25日<br>(木) | 東京 (成田) 着                               | 11:25                            |                         | 到着後解散                                  |         |

激したり、リプロダクティブ・ライツの知識を高めたりしている。特に、彼女たちは高校生を対象とした性教育に力を入れており、ピアエデュケーションの組織化を図り、ピアエデュケーションを受けた学生たちがそこで得た知識を学生同士で話し合い、お互いに共有し合うことを目指している。さらに、周りの人にその知識を伝えることも目標にしている。

彼女たちは、私たちのピア活動と同じく、教えるというよりも、高校生と一緒に考えていくという姿勢で臨んでいる。なお、学生のピアカウンセラーは1999年の時点で1,500人いるとのことであった。

活動は、まずはプログラムの導入としてゲームを行い、高校生たちにその場の雰囲気慣れてもらい、みんなで話し合えるようにして進めている。性感染症の説明では、性感染症はどのようにして伝わるのかやその予防法を話している。また、望まない妊娠についても説明している。

また、HIVの感染リスクをゲームで教え、授業後には「質問箱」に誰にも言えないような悩みや相談事を書き入れるなどする。彼女たちによれば、「書いてくれるということは、何かで悩んでいるということなので、私たちもなるべくこれに答えられるようにしている。」とのことだった。

私たちは、医学部学生の発表を聞いて、自分たちの行っているピア活動と彼女たちのピア活動とで、よく似ている部分、逆に違っている部分に気づかされた。



図1 国際医学生連盟 (IFN) における交流風景

### 3-2 国際家族計画連盟 (ロンドン)

ロンドンの大学の一角にある国際家族計画連盟 (IPPF) 本部を訪問した。IPPFは、家族計画(計画的な受胎調節)、セクシュアルリプロダクティブ・ヘルス/ライツ推進のための活動を行っている世界最大の国際NGOである。

IPPFの目的は、すべての人がリプロダクティブ・ヘルスを獲得できること、安全でない中絶をなくすこと、ジェンダー間の平等の達成と女性のエンパワーメントの推進等である。IPPFの活動には、若者の性意識や性行動を深めるため、若者間でピア教育を実施するユース・プログラム等がある。

IPPFの職員の20%は24歳以下の若者たちで、ユニークな年代の組み合わせで構成されている。私たちは、そのIPPFの若者と触れ合い、学ぶことができた。まず、私たちは二人の若者の代表と権利について語った。ここでの「権利」とは、人権と性に関する権利である。

イギリスでは、リプロダクティブ・ヘルス活動の一つとして権利に主眼を置いたアプローチがなされてきた。つまり、誰もがサービスを受けられ、暴力を受けず、堂々と病院に行くことができ、秘密は守られるという権利など、多くの若者が見失っているのではないかとと思われる権利があげられる。

一つの保健プログラムを作り上げていくにあたり、二人の若者代表は「何よりも大切なのは対象となる相手を見つめなくてはならないことである。」と熱く語っていた。そこには共感できる内容が多くあった。相手を尊重することは、基本中の基本であると感じた。ある課題にアプローチし、そこから出てきた結果のみに着眼するのではなく、その過程の中に対象である若者をいかに巻き込むか、このことが重要なのだということに気づかされた。若者のニーズに応じていくためには、自ら主体的に取り組む姿勢が大きなウエイトを占める。

私たちは、「権利」について二人の話を聞くだけでなく、今現在、世界中で起きている事例を挙げ、その事例の中で、何が問題なのか、問題があるとしたら、どんな対応がとられるべきなのか、対応できるのか、そしてその根拠となることとしてどんな権利に関わっているのか、等々を議論した。議論の中身は、性に関する差別的な問題がほとんどであったが、そうした様々な問題を考えて見えてきたことは、もっと若者たちに自分の持っている「権利」について知ってもらいたいということであった。さらに、自分たちの誕生とともに授かった「生」と「性」の情報を提供していくことで、若者自らが「性」にもっとオープンになってもらうことの必要性であった。

正しいセクシュアルヘルスの情報を提供していただくだけではなく、そこに若者自身が自ら向き合っていかなければならない。そのことの重要性を理解していくためには、やはりいかに若者を取り込んでいくかが大切なのである。そのことは特別なことではなく、当たり前であり、自分自身を大切にできる一つの手段ではないだろうか。

ところで、彼ら若者たちの活動は元々4人の大学生により始まったそうである。彼らは、家族計画協会の一角を借りて活動の事務所とした。彼らの活動は、以下のように実に幅広い。

#### ①ピアカウンセラー養成

高校へ出向き、高校生ピアのトレーニングをする。養成するだけでなく、その後の活動状況や養成の結果などについて、高校の先生からの評価を求める。

#### ②リソースセンター

性についての情報がもらえる場所。資料も無料。自由にパーソナルコンピュータを使い、リンクしているサイトなどを閲覧できる。

#### ③移動式掲示板

AIDSや性、若者の知りたいことなどを掲示して若者の集まる場へ出向く。パンフレットを持参し、自分たちについて宣伝する。その場で相談も受け、情報とコンドームを配布する。

#### ④立ち寄り診療所

病院以外で診療所を開くことにより、診療や治療を受けやすくする。教育センターと連携して、売春婦の背景を考慮しつつ、売春婦が社会復帰する際の自分への自信を身につけさせる。セミナーを開く。

#### ⑤ピア以外のスタッフと連携

美大生や一般の学生と相談し、内容の伝わりやすさを考慮して、パンフレットや資料などに身近なデザインを取り入れていく。

#### ⑥マスメディアとの連携

活動の資金づくりとしてスポンサーを得る。ラジオ、CMに出演する。

彼らはどうして思春期のセクシュアルヘルス活動を成功に導いたかを次のように語ってくれた。

①トレーニングが徹底されていたため、質の高いピアカウンセリングが行えた。

②常に目的を明確にしていた。

③必要と思われることはできる限り取り入れた。

④民間的な活動を崩さない。

⑤周囲の反応や活動の広がりを常に把握した。

⑥活動の変更や中止をする勇気を持っていた。

⑦自己評価を忘れず、評価方法も様々な種類を用意し、多面的多角的に評価した。

⑧評価法・評価者などシステム自体も自分たちで作った。

⑨資料やレポート作成においても分担・編集まできっちり行え、後々まで使えるようなきめ細かいシステムを作った。

話を聞いていく中で、私たちの感じたイギリスと日本の違いは、政府の行動にあった。イギリス政府は、日本に比べて性に関して積極的な行動をしている。例えば、イギリスでは若者はピルを無料で手に入れることができる。それに対して日本では1か月3千円もかかる。日本ではピルを認可しているのにも関わらず、実際若者が使おうと思っても金銭的負担のために、ピルを購入できなかったり、病院に行くことができなかったりと、実現からほど遠い結果となっている。ピル普及のカラーチラシに費用を使うなら、ピルそのものの値段を下げればいいのかと考える。

もう一つ感じた違いは、私たちは自分たちのことを「ピアカウンセラー」と呼ぶが、イギリスの若者は「ピアエデュケーター」と言う。どうしてこのように呼ぶのかというと、「ピアカウンセラー」と言われると、心理学的な意味合いが感じられるからとのことであった。

### 3-3 スウェーデン性教育協会(RFSU)

欧州ピアカウンセリング研修の7日目にスウェーデンのストックホルムにあるスウェーデン性教育協会(RFSU)を訪ねた。スウェーデン性教育協会は今年で70年目を迎える非営利の性教育団体である。非営利組織であるため、政治や宗教との関わりがないという特徴がある。そのために、AIDSや性的虐待に関する法律を作成する時には、政府はこの協会に相談しなければならないという。非営利組織の性教育協会はスウェーデンではここしかない。

各地にはヤングクリニックが250か所ほどある。この組織の目的は、小学1年生から性教育を受ける権利を保障し、避妊薬を安く手に入れられるようにし、また安全に中絶ができるようにするなどである。主な活動は、社会の中で中心的役割を持つ者への教育を行い、この知識を次の世代に伝え

ること、また性教育の手段や方法の計画や青少年クリニックの運営である。

私たちが「ピアカウンセラー」と言うのに対し、スウェーデン性教育協会では「ピアエド्यूケーター」と言う。なぜピアカウンセラーと呼ばないのか質問したところ、以前はピアカウンセラーもいたが、ピアカウンセラーでいられる期間に限界があり、その期間内ではニーズに答えきれないという理由でこの呼称は廃止されたということだった。

スウェーデンで言うピアエド्यूケーターを、私たちはピアカウンセラーと呼んでいる。つまり、活動内容は同じだが呼び名が違う。RFSUと私たちピアカウンセラーの共通点は、集団を対象にしていることや、個々のメンバーの考えを否定せず、自分の意見や感情を押しつけないということである。

しかし、活動の方法をみると、例えば、私たちは男女一緒に性教育を行っているが、ここでは別々にしているなど多少の違いもある。また、RFSUのエド्यूケーターは1回活動をする日本円にして約5千円ももらえるため、アルバイト感覚で活動する大学生が多い。これに対して私たちはボランティア活動として行っている。

スウェーデンで性教育ができるのは教師か看護師と決められている。そして、彼ら指導者だけで対応しきれないところをこのピアエド्यूケーターがサポートしており、これが大切な仕事の一つとなっている。

RFSUと私たちの活動ではいろいろな面で違いがあり、同じ性教育活動でも様々な方法や考え方がある。私たちには想像のつかない活動内容を知ること、視野が一層広がった。私たちの活動で活かせるところは取り入れ、自分たちのピアカウンセリングのやり方などを改善していきたいと思った。それは私たちだけではなくRFSUでも同じで、性教育の方法を時代や青少年のニーズにあっ

たものにするため、不必要なことは排除し、新しい方法を見出す努力をしている。

### 3-4 もっと仲間とともに・・・

他国の活動を知ることは、自分たちの活動を見直すよい機会になった。常に自分たちのやり方を眺め、それがどういう効果を現すのか、努力が必要となるのはどこなのか、これを理解し向上につなげなければならないと改めて感じた。その視点からも今回の欧州研修は私たち一人一人に何かしらの影響を与え、私たちの活動に新たな風を吹き込むものになった。

また、海外の性教育について学ぶ合間に、私たちは観光も楽しんだ。ヨーロッパはメンバーのほとんどが初めてであり、日本とは全く違う美しい景色、美味しい食べ物に感動した。オランダの風車やイギリスのピックアップ、スウェーデンの美しい湖・・・そして、私たち看護学生のあこがれ、フローレンス・ナイチンゲールに深い聖トーマス病院・ミュージアムも見学し、看護学習への意欲をさらに高めることができた。

今、日本の若者の性に関する現状は、性感染症・HIVの問題などを考えてみれば、とても深刻なものである。早急な打開策が必要かも知れない。まず私たちは、しっかりとセクシュアルヘルスの基盤を固めて、少しずつ知識・スキルを積み重ねて、みんなに思春期保健の重要性を訴えかけていきたいと思っている。



図2 フローレンス・ナイチンゲール ミュージアム



図3 フローレンス・ナイチンゲール像

## 委員会等報告

## 人事委員会

委員長 野口美和子

「自治医科大学看護学部教員の選考方法等に関する内規」第2条の規定により、次のとおり人事委員会が開催された。

第1回（平成15年9月18日）

欠員が生じている領域の教員（講師）を補充するため「自治医科大学看護学部教員の選考手続・資格基準規程」に基づき申請書類が提出された講師候補者1名（母性看護学領域）を選考した。

第2回（平成16年2月12日）

欠員が生じている領域の教員（助手）を補充するため「自治医科大学看護学部教員の選考手続・資格基準規程」に基づき申請書類が提出された助手候補者3名（基礎看護学領域1名、母性看護学領域1名、老年看護学領域1名）を選考した。

第3回（平成16年3月18日）

欠員が生じている領域の教員（助手）を補充するため「自治医科大学看護学部教員の選考手続・資格基準規程」に基づき申請書類が提出された助手候補者1名（成人看護学領域）を選考した。

なお、看護学部が完成する平成18年3月31日までの教員採用（助手を除く。）については、文部科学省における教員資格審査を受ける必要がある。

## 教務委員会

委員長 塚越フミエ

教務委員会は、8月を除き毎月1回、第2木曜日の午後に定例会議を、臨時委員会を5月に1回、9月に1回、3月に2回の計14回開催した。以下に教務委員会の概要を報告する。

4月は、委員会の年間計画を確認し、役割分担を決定した。討議内容は、臨床指導者研修会、委員会メンバーの議事録の確認方法、学生の選択科目の選択方法、実習等に向けた賠償責任保険WILLの全学生の加入、科目等履修生3名の受け入れについてであった。

5月は、既修得単位認定と予算配分について討

議したが、本委員会では討議しきれなかったため、臨時教務委員会を開催し、決定した。

6月は、実習の準備として、実習要綱の共通部分の検討や学生の健康管理上の準備、更衣の場所などについて討議し、準備を進めることとなった。さまざまな学内教育関係設備の問題等も討議した。

7月は、シラバスの修正と時間割編成を開始することや再履修科目、認定科目を最終成績に記述する方法について決定した。

9月は、前期定期試験結果と再試、成績不良者に対する補講、平成16年度教育費予算計画に基づく請求金額について討議した。

臨時教務委員会では、前期試験不合格者に対する対処について検討し、科目責任者が中心となって学習指導を強化することとなった。

10月は、既修得単位認定、平成16年度学年暦、授業援助者の依頼の可能性について、領域別実習の準備のワーキンググループの立ち上げ、2年生対象の文献検索ガイダンスの実施結果、3年生の来年度の健康診断の時期について検討した。

11月は、学生の退学、科目等履修生の前学期単位認定、平成16年度の時間割について検討した。

12月は、平成16年度オリエンテーション・ガイダンスの全体スケジュールと役割分担、購入図書、平成16年度領域別実習の学生ローテーション、平成16年度の実習要項の作成、シラバスの調整、実習時の学生指導対策について検討した。

1月は、以下の報告事項が中心であった。実習状況、シラバスの内容確認、図書館報告、編入学生の単位認定作業およびガイダンス、定期試験スケジュール等であった。

2月は、学生の退学、定期試験の日程と監督者、時間割の最終決定、成績不良者等について討議した。

3月は、定期試験の結果報告と再試験の日程確認、平成16年度の教務委員会の役割分担、1年間の委員会活動の総括と来年度の予定、臨時教務委員会の日程の決定、再履修科目のある学生に対する指導について討議した。

臨時委員会は2回開催した。1回目は、2年生5名の進級に関すること、2回目は、2年生の補講実習学生に対する単位認定の準備のための会議であった。

3月は、学生の進級問題が発生したため、臨時委員会を2回開催することになったが、年間を通

じておおむね順調に活動できた。

## 学生委員会

### 委員長 高村寿子

開部2年目を迎え、学年進行も1・2学年となり、学園生活もより活発化してきたことに伴い、学生委員会の機能・役割も拡大化した。本来の所轄事項は、1. 学生の厚生補導に関する事項、2. 学生相談・就職対策などに関する事項、3. 学長賞の選考に関する事項、4. 看護学生寮の管理運営に関する事項、5. その他学部長が必要と認めた事項である。また、関連する学内各種委員会として、1. 保健委員会、2. 車両委員会がある。

平成15年度委員会活動での大きな変更点は、定例委員会を毎月第1木曜日に変更したことである。夏季休暇期間中の8月を除き毎月、計11回開催した。委員構成は、表1に示すように委員長1名、各領域代表者8名および看護学務課の2名である。この他に、表1の脚注に示すように、学生委員でない寮務主事1名、および学生サポートチームのメンバー5名が選出された。

審議・検討された議題は、表2に示すようである。前年度同様に年間を通じて最も審議・検討されたのは、学生の健康管理とこころの相談システムのあり方であった。健康管理なかでも健康診断を含む身体的な健康管理については、大学保健室と保健委員が連絡を密にして有機的な連携を図り、健康調査カードの作成・検討など木目細かな支援が展開できた。他方、こころの健康に関しては、学内外のメンタルヘルス・クリニックなどの情報を提供し、活用を働きかけるなどを試みたが、学

内、特に学部内での対応を望むニーズが高いことから、前年度に引き続き次年度への継続審議事項となった。

長期経済不況の影響を受ける学生のために、日本育英会や自治医科大学就学資金制度の積極的な活用を支援した。

学生寮関係では、まず学生寮自治会の年間行事である防災訓練の計画・実施や、開錠時間などについて指導・助言した。同時に、平成16年度夏に新寮移転が決定したことから、寮生のニーズが高まり、寮務主事と学務課がその対応に追われた。

学業や部活動など充実した学園生活が送れるよ

表2 学生委員会の議題

| 回数 | 年 月 日      | 議 題                                                                                                    |
|----|------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1  | 平成15年4月3日  | ①防災非難訓練について<br>②健康調査カードについて<br>③学生相談のあり方について                                                           |
| 2  | 平成15年5月8日  | ①貧血検査結果への保健指導について<br>②防災避難訓練の実施結果について                                                                  |
| 3  | 平成15年6月5日  | ①看護学部相談システムについて<br>②教育・学友会活動等における女子学生寮の開錠時間について<br>③SARS（重症急性呼吸器症候群）への対応について<br>④ツベルクリンの2回目未接種者の対応について |
| 4  | 平成15年7月3日  | ①海外渡航時における届出について<br>②看護学部における学生の相談システムについて                                                             |
| 5  | 平成15年9月4日  | ①ロッカールームの使用方法について<br>②学友幹事会の報告について                                                                     |
| 6  | 平成15年10月2日 | ①学生指導小委員会（仮称）について<br>②学生相談室について                                                                        |
| 7  | 平成15年11月6日 | ①寮自治会後期役員決定の報告について                                                                                     |
| 8  | 平成15年12月4日 | ①冬季休業中の事故防止等について<br>②第1回学生指導小委員会（仮称）の報告について”（名称、学生サポートチームと決定）<br>③日本育英会奨学生適格認定の報告について                  |
| 9  | 平成16年1月8日  | ①学生サポートチームのその後の活動報告について                                                                                |
| 10 | 平成16年2月5日  | ①学生の駐車場の不正使用について<br>②看護学生寮防災訓練について<br>③新3年生の健康診断について<br>④4月オリエンテーションについて                               |
| 11 | 平成16年3月4日  | ①看護学生寮防災訓練について<br>②学生サポートチームの中間報告及び検討事項について<br>③平成16年度学生委員会の役割分担について<br>④学生の健康管理に関する報告について             |

表1 構成および役割

| 委員名   | 領 域   | 役 割            |
|-------|-------|----------------|
| 高村 寿子 | 一般教育  | 委員長・奨学生選考・学年担任 |
| 竹田 俊明 | 専門基礎  | 学生健保理事         |
| 松田たみ子 | 基礎看護学 |                |
| 篠澤 隼子 | 地域看護学 | 車両委員・寮務主事      |
| 永井 優子 | 精神看護学 | 保健委員           |
| 成田 伸  | 母性看護学 |                |
| 川口 千鶴 | 小児看護学 | 学年担任           |
| 塚越フミエ | 成人看護学 | 奨学生選考・学年担任     |
| 水戸美津子 | 老年看護学 |                |

\*寮務主事：曾我部美恵子

\*学生サポートチーム：余語琢磨、高村寿子、大久保佑子、  
春山早苗、西岡和代、高木初子

う支援する学生サポートチームが10月に発足し、若手教員がメンバーとして選出された。同時に、1・2学年の学生からもメンバーが選出され、教員メンバーと共に、学生のニーズ調査から具体的な活動を開始した。

年度末には、平成15年度の学生生活へのサポートの実情から平成16年度のあり方を検討し、平成16年度4月のオリエンテーションに臨んだ。

## FD・評価実施委員会

委員長 野口美和子

FD・評価実施委員会の所轄事項は、学部教育内容等の改善のための組織的な研修および研究の実施に関することであり、活動方針を以下のとおりとした。

### 1. 教育評価に関する事項

- (1) 学部カリキュラムの評価に関すること
- (2) 学生の到達度、成績評価、教員の授業評価(学生および第三者による評価)に関すること
- (3) 教育方法、教育環境の改善に関すること

### 2. 教員の資質開発に関する事項

- (1) 授業技法の改善の具体的検討に関すること
- (2) 教員研修会の企画、実施に関すること
- (3) 授業技法、評価に関する教員セミナー等の計画に関すること

委員会の構成員は、学部長(委員長)、一般基礎、専門基礎から1名、看護学領域4名の計6名である。

#### 第1回(平成15年6月26日)

平成15年3月24日に行われた平成14年度授業研究会の事後処理としての報告書発行がすすめられているので、それに関する事項を討議し、今年度の委員会活動として前期と後期について2回の授業研究会を行うこと、ひきつづき授業評価を行うことを確認した。

#### 1) 平成14年度授業研究会報告書について

次回から統一のため報告書原稿のひな形を提示する。報告書に研究会プログラムを含めることにする。学生への広報については、学生から報告書閲覧の申し出があった場合には応じることが了承された。

#### 2) 平成15年度第1回授業研究会について

原案に基づいて討議し、実施要領が決められた。

①開催日時は平成15年9月1日とする。

②発表時間は原案どおりとするが、昨年発表者から不足であるとの意見がでていたことを勘案し、休憩時間と昼食時間を少し長めにとっておいて、時間調整、対処することとした。

③閉会時に写真撮影を行うこと。

④記録は、テープ録音をする。(前年度はビデオ記録)

⑤会場運営は、前期は地域看護学領域が、後期は老年看護学及び小児看護学領域が行うこととした。(前年度は成人看護学であった。)

### 3) その他

前年度の授業研究会で報告した1学年科目の担当者は、自己課題に沿って今年度その改善を求められること、当委員会でフォローしていくことを確認した。

#### 第2回(平成15年11月27日)

#### 1) 平成15年度授業研究会報告書について

前期授業研究会のまとめについて、総合討論の記録を会話体から内容を変えずに言い回しを変えたとの報告があった。また、授業研究会報告書の作成については、予算措置からも前期、後期分を合冊とし、前年度同様、年1回の発行とすることが了承された。

#### 2) 後期授業研究会について

後期授業研究会について討議し、以下のような実施要領を定めた。

①今年度新たに開講した科目について発表する。  
学部完成年度(4年次)までは同様の方法で実施する。

②開催日時は平成16年3月26日とする。

③後期は基礎看護学実習Ⅱと成人看護学実習Ⅰが入ってくることが注目される。

### 3) その他

授業評価の提出について、取り扱い方に不明な点の一部あるとの意見があり、次回委員会で検討することとした。例えば、現代保健・看護セミナーには2名の教員が関わっているが、2名別々に提出するのか、まとめて1枚提出するのか(つまり、教員個人の評価なのか、科目の評価なのか)である。次回委員会では、この他に実習評価について討議する。

第3回(平成16年2月26日)

1) 平成16年度FD・評価実施委員会の副委員長の人選について

この件に関して、竹田教授が推薦され、了承された。

2) 平成15年度後期授業研究会プログラムについて

平成15年度後期授業研究会プログラムについて提示原案のとおり了承された。

3) 授業研究会アンケートの実施について

後期授業研究会では参加者アンケートを実施して、今後の運営の参考にすることになった。アンケート案について討議し、一部修正して作成することとなった。

4) 平成14年度授業研究会の自己課題について

この件については、報告書から自己課題のところを抜き出して整理し、表にしたものを各領域に配布し、必要があれば内容を見直して表現を簡潔・明瞭にし、平成15年度にどう対応してどのような結果が得られたのかを提出していくこととした。

5) 実習評価について

実習評価については各領域共通であるが、項目としては原案で妥当であるので、今回の授業研究会で発表予定の「基礎看護学実習Ⅱ」、「成人看護学実習Ⅰ」及び「成人看護学実習Ⅱ」はこれを使用して評価を行い、4年後のカリキュラム改訂の基礎資料としていくことが了承された。

6) 授業評価の方法について

セミナーについては、2名の教員が実施しており、それに対する授業評価を科目の評価とするのか、個々の教員評価とするのか曖昧であることから検討を行った。その結果、セミナーの授業評価は、科目の評価とし、学生の評価書式も「教員グループに対する学生の評価等」と改めることとなった。なお、それ以外の授業科目については、学生による教員評価とすることが了承された。

7) その他

授業評価票について、現行の担当者自身が配布し回収するという形式でなく、担当者以外の者が配布し回収及び集計する方法がないかとの意見があったが、システム化しない限り現状では対応が困難であるとの結論に達した。

## 紀要年報編集委員会

委員長 渡邊亮一

平成15年度の紀要年報編集委員会は、前年度から継続の委員に、水野照美講師を加えた計5名で構成し、この委員5名に看護総務課の松本則子主事を加えた6名で計3回の委員会を開催した。

第1回(15年5月15日)の委員会では、「自治医科大学看護学部年報」を「自治医科大学(医学部)年報」とは別に発行することとし、第1号の編集方針、執筆要領、目次、および編集作業のスケジュールを審議し、決定した。また、「自治医科大学看護学部紀要」第2巻の編集作業スケジュールを審議し、決定した。

第2回(平成15年11月7日)の委員会では、年報の編集作業状況と紀要の原稿の投稿状況を確認した。また、投稿予定の原稿を含めて、投稿原稿の査読者を審議し、決定した。

第3回(平成16年2月25日)の委員会では、紀要の投稿原稿の査読結果に基づいて、採用・掲載原稿を決定した。また、紀要の投稿規程に紀要に掲載された原稿の著作権は自治医科大学看護学部へ帰属することを決定した。

上述の委員会の審議を経て、「自治医科大学看護学部年報」第1号を平成15年12月25日に発行した。第1号の体裁はA4判2段組で、総ページ数は58ページであった。また、内容は、3編の特別報告、委員会等報告、教育研究分野別報告、研究業績録、資料であった。

「自治医科大学看護学部紀要」第2巻は平成16年3月26日に発行した。第2巻の体裁はA4判2段組で、総ページ数は72ページであった。また、内容は、塚越フミエ教授の巻頭言にはじまり、報告5編であった。

なお、平成15年度に発行した年報第1号および紀要第2巻は、学内の教職員に配布するとともに、国立国会図書館をはじめ、全国の看護系大学、看護系短期大学などに送付した。

## 予算委員会

委員長 野口美和子

所管事項は学部の教育・研究にかかる予算に関することで、教授会構成員は4名(学部長、常置

委員会委員長)である。

#### 第1回(平成15年4月17日)

##### (1) 平成15年度予算の概要について

平成15年度自治医科大学予算の特色と会計毎の予算額について概要説明がなされた。

##### (2) 平成15年度看護学部教育研究経費等の予算額について

###### 1) 看護総務課所掌予算について

- ① 消耗品費は、前年同額である。今年度は必要とする教員にナースシューズを購入することとする。
- ② 印刷製本費は、前年同額である。(平成14年度は短大年報500部、看護学部紀要600部作成)
- ③ 個人研究費・研究旅費は、教員の職位別人頭分の予算となっている。
- ④ 共同研究費は、あらためて看護系7領域で検討のうえ領域毎の配分を決めることとなった。
- ⑤ 海外出張費は、前年同額である。今後教員に対して申請書の提出を求め、あらためて対応することとなった。(平成14年度は1件)
- ⑥ 負担金については、前年度実績による予算額になっている。

###### 2) 看護学務課所掌予算について

- ① 実習計画策定調査の旅費は、前年同額である。
- ② 消耗品費は、各領域からの13,695千円の要望額に対して調整後10,000千円で要望したところ、内示額は6,250千円であった。
- ③ 機器備品費は、各領域からの10,688千円の要望額に対して調整後9,000千円で要望したところ、内示額は6,000千円であった。(前年比1,000千円の増)
- (3) 各教員に配当の研究費、研究旅費の取り扱い留意事項について

留意事項については、研究費・研究旅費配分通知と一緒に配付済みだが、年度末に集中して執行することがないよう計画的な執行について、教授会において周知することとなった。

## 図書館運営委員会

委員 永井優子

看護学部図書館運営委員は、昨年度と同様に竹田俊明教授と永井の2名で担当した。

平成15年度の本委員会は5回(4月10日, 6月30日, 10月22日, 11月4日, 2月17日)開催され、平成15年度図書費予算の執行計画、図書館運営の現状と今後の方針、利用動態に基づいた雑誌および図書の購入、卒業生への支援の強化、学内IT化への対応、メディアスタジオ(旧写真室)の運営等について検討した。外国雑誌の慢性的高騰によって生じている本委員会の課題は、長期的な雑誌の購入計画をたて、Medlineや医学中央雑誌の受益者負担の見直しを図るなど、今後も継続して検討することになっている。看護学部としても長期的に検討すべき課題である。

また、看護学部の教育および看護学の実践・研究に不可欠な図書および雑誌を整備するために、昨年から実施している夏および春の2回の図書購入希望アンケートを実施し、図書館運営委員が取りまとめて購入案を作成して教務委員会で決定し、図書館職員の協力を得て予算を考慮して、図書およびVTR計300点を購入し、平成16年度からは和雑誌12誌を追加することになった。さらに今年度からは、看護学系教員の協力を得て、看護学系の図書館運営委員が中心となり、隔週1回計画的に計25回新刊図書を選書して総計345点(平成15年度予算の約20%)を購入し、毎月購入図書をリストにして全教員に配布した。予算残額が不足した2月以降は、翌年度支払いで購入できるように調整した。これらの雑誌および図書の購入については、今後図書に関するワーキンググループを立ち上げて、継続して実施できるように検討している。さらに、昨年から検討を続けている看護学専門書の配架についても看護学系教授で検討を進め、現在の図書の分類法を基にして看護学の体系を整理して分類案を作成し、図書館職員とともに検討を進めている。

今年度から、学生の図書館利用を勧めるために、新入生に対するオリエンテーションと文献検索ガイダンスを図書館職員の協力で実施した。すなわち、平成15年度から新入生オリエンテーションを50人ずつ2回に分けて出席を義務づけて行った。また、文献検索ガイダンスは2年次学生の希望者84名を対象に1回20名を限度として5回に分けて実施した。来年度以降も2回に分けた図書館オリエンテーションと、今年度未受講者および3年次編入生も含めて文献検索ガイダンスが円滑に進められるように、図書館職員とも検討を重ねている。

## 保健委員会

委員 永井優子

看護学部保健委員は、看護短期大学の健康管理も含めて、前年度から永井が担当している。

平成15年度の本委員会は、平成16年3月22日に1回開催され、平成15年4月から平成16年2月までの保健室取り扱い状況、定期健康診断受診状況、針刺し事故の発生状況、ツベルクリン検査結果、健康相談統計についての報告を受けた。看護学部および看護短期大学の教員および学生については、定期健康診断および第1回ツベルクリン検査の受診率は100%であり、高く評価された。看護学部1年生は16名がBCG接種を受け、未接種は1名であった。また、看護短期大学学生の針刺し事故が1件あったが、看護学部の学生の針刺し事故はなかった。

平成16年度保健委員会委員および保健室専任医師を選任し、平成16年度保健業務計画を検討した。日本医療機能評価機構の審査の準備として、健康診断の受診率の向上について努力し、法定項目以外の健康診断項目の追加についてはさらに検討を続け、新規採用職員の2段階ツベルクリン反応は平成17年度採用者から入職時に結果の報告を義務づけることになった。

看護学部の学生の健康管理としては、今年度から新入生の学生委員会のオリエンテーションの中で約45分間の健康管理に関するガイダンスを行い、看護学助手の協力を得て、アルコールパッチテストを含めたアルコールに関する健康教育と禁煙教育を45分間行った。また、母性看護学の成田教授によって60分間の性行為感染症に関する健康教育を行った。在学生については、学年担任のガイダンスで健康管理スケジュールについて周知した。また、新入生を対象とした破傷風予防接種については、前年度は十分に周知できなかったことに対応して、今年度に限り、2年次学生の希望者も接種できるように準備した。さらに、看護学実習等の時期を勘案して、看護学部カリキュラムを踏まえた学生の健康管理について、保健室職員も含めて検討し、3年次学生については、定期健康診断を早期(前年度3月)に看護学部内で実施することになった。学生のボランティア6名と看護系教員の協力を得て3月17日に行い、全員が受診した。また、自分の麻疹・水痘の抗体価を把握している

学生が1割に満たなかったことから、学生の代表者に自分の健康管理をどのように行っているかについて検討するように求め、その結果から授業で学習した健康に関する知識が活用されていないこと、検査結果を紛失していることが明らかになり、健康手帳等を用いて学生が自分の健康を管理できるような指導について、学生委員会で検討を続けている。

## 臨床指導者研修会

担当 成田 伸

看護学部では、前身である看護短期大学の時代から、教員と附属病院看護部教育担当者によって構成される臨床指導者連絡会を中心に、教育側と臨床側との間に緊密な臨床指導体制を作り上げ、臨床実習の運営の調整や臨床指導者の研修・教育を行ってきた。平成14年度から看護学部がスタートし、連絡会のメンバーとして看護学部教員が参加し、従来の連絡会運営および臨床指導者研修会の開催を行いながら、連絡会・研修会・実習説明会のそれぞれの位置づけ、活動内容の整理を開始し、平成15年度に向けて大きく内容を変更してきた。

そこでの変更点は、臨床での学生指導の主な責任は学部教員が負い、臨床スタッフによる学生実習に対する指導・援助は、すべての臨床スタッフが負うことの理解を促進するために、研修の対象者を臨床経験2年半以上にし、受講者本人の希望で幅広く受講可能とした点である。また、教育効果をあげるために集中講義形式にし、1日4時限5日間で開催することとし、カリキュラムは、「看護教育学」、「臨床実習指導論」、「看護過程」、「看護事例検討」、「臨床実習における人間関係」にし、併せて看護学部の教育理念やカリキュラムについての説明を行うことにした。

平成15年度には、前期(土曜日連続5週間開催)、夏季集中(5日間連続)、後期(土曜日連続5週間開催)の3回開催し、84名の修了者を認定した。

研修会は、このプログラムで平成16年度も継続するが、看護学部の実習の充実に合わせて、適宜修正していく必要があると思われる。

## 教育研究分野別報告

## 学 部 長

教授 野口美和子

### (1) スタッフの紹介

教授 野口美和子

### (2) 教育の概要

1) 福島県立医科大学外部評価委員, 岐阜県立看護大学運営協議会委員, 石川県立看護大学アカデミックアドバイザー, 山梨県立看護大学参与として活動を行った。

2) 島根医科大学医学部看護学科, 群馬大学医学部保健学科, 沖縄県立看護大学において非常勤講師として講義を行った。

## 一般基礎

教授 高村寿子

### (1) スタッフの概要

教授 高村寿子

教授 渡邊亮一

講師 余語琢磨

### (2) 教育の概要

1) 高村は, 2年生前学期の選択科目「教育と人間」(30時間1単位)を, 非常勤講師の青柳宏助教授(宇都宮大学)とともに担当した。高村は, 生涯教育学: アンドラゴジー(成人教育学)とペタゴジー(未成年教育学)の原理, 生涯発達理解と特質, 生活のなかの学習/学習構造などについて講義し(12時間), 青柳講師は, 「教育」とは何か, 教育の目的, 教育の社会的機能, 教育における人間関係などを講義した(18時間)。前半は, 「ケアリングとしての教育」の視点から教育と人間のかかわりの理解を深めた。後半は, 教育システム論が優先される教育学において, その領域は学校だけではなく, 地域や医療にも存在すること, 今の時期だけでなく一生涯にわたって持続するものであることの理解を深めた。さらには, 教育の対象者をその成長発達の視点からとらえ, 実践していくための理論とスキル, ペタゴジー・アンドラゴジー・ジオゴロジーに関心を抱かせた。

2) 高村は, 2年生前学期の選択科目「人間関係論」(30時間1単位)を, 大島知佐子非常勤講師とともに

に担当した。高村は, 自己理解・他者理解, 自己主張・自己表現, 自己と他者の相互作用などについての体験学習を行い(12時間), 大島講師は, 人間関係論の意義, 社会的相互作用論と社会的役割, 心理・文化・社会的発達段階における人間関係, 心理療法の諸理論と技法, 援助職を取り巻く様々な人間関係などについて講義した(18時間)。前半は, 人間関係を支える諸理論を基にしたロールプレイを交えながら授業を展開した。後半は, 人間関係のとり方をグループダイナミクス理論に基づいた構成的エンカウンターを実施し, 体験学習を実施した。

3) 高村は, 2年生前学期の選択科目「健康論」(30時間1単位)を, 板井美浩講師(自治医科大学)とともに担当した。高村の授業内容は, 「新しい健康理論」の意味と意義, ホリスティック・ヘルスの概念と問題点, 日常生活行動・ライフスタイルの変容, 食習慣の欧米化と慢性的な運動不足とセルフケア, 青年期の性と健康生活, QOLの視点から見た青年期の健康生活, ウォーキングの実践で, 板井講師の授業内容は, 体力テスト, 各種スポーツの実践(テニス, バドミントン, バスケットボール, バレーボール)であった。前半は, 生涯にわたって求められるセルフケアの重要性を理解し, 青年期における今からその実践していく考え方と方法を身につけるきっかけづくりを理解した。後半は, 先ず身体を動かす喜び・楽しみを持たせ, 生涯にわたる健康生活づくりを考えさせることをねらった。

4) 渡邊と余語は, 野山広非常勤講師とともに, 1学年前学期に「情報収集と表現法」の講義ならびに演習を行った。「情報収集と表現法」は, 30時間の選択科目で, 効果的な情報収集・思考・表現を行うための基礎的な方法を学習することを目的としている。余語は「情報という概念」, 「コミュニケーションと言語」, 「言語情報の収集と問題発見の技術」, 「論理的な分析と思考の方法」について, 野山講師は「言語・非言語コミュニケーションの実践」, 「論理的・演劇的知による対話と論議の実践」について, 渡邊は「プレゼンテーションを助ける技術」について講義および演習を行った。なお, 最終回には, 学生に実際に課題を与えてグループごとにプレゼンテーションを行わせた。

5) 渡邊は, 1学年後学期に「保健医療情報学」の講義ならびに演習を行った。「保健医療情報学」

は、30時間の選択科目で、看護における情報学の必要性を理解し、基礎的な情報処理能力を養うことを目的としている。「情報とは何か」、「看護と情報処理」、「コンピュータとは」、「コンピュータのハードウェアとソフトウェア」などについて講義した後、Wordによる文書作成の演習、Excelによる表やグラフの作成の演習を行った。

6) 渡邊は、2学年前学期に「保健医療情報学演習」の講義ならびに演習を行った。「保健医療情報学演習」は、60時間の必修科目で、統計的な知識を身につけ、それを実際の医療や看護の場面で応用できる能力を養うことを目的としている。「尺度と度数分布」、「代表値と散布度」、「相関と回帰」、「確率・順列・組み合わせ」、「確率分布」、「仮説検定」、「分散分析法」、「推定」などの統計学および「保健統計」について講義し、統計解析パッケージ「Halwin」を使って実際のデータを解析する演習を行った。

7) 余語は、1学年前学期の選択科目として、地域に暮らす人々の生活・意識の特性と変容を歴史的視点から理解することを目的に、26時間の「歴史と人間」の講義を行った。テーマは、環境と技術、暮らしと食、祈りと心性、病いと健康、近世の都市衛生で、視覚教材の多用や近隣の有機栽培農家・史跡等への校外学習により、事象へのリアリティと関心の深まりを企図した。受講者は78名であった。

8) 余語は、1学年前学期の必修科目として、個人と社会の結びつきを生活者の視点から考察する「生活と社会」のうち、開講時の2時間を担当した。人文・社会科学における人間像の現状を概説するとともに、関連諸科目のオリエンテーションを兼ねた。

9) 余語は、1学年前学期の選択科目として、地域生活と健康との関連の理解を目的とする「地域の生活と健康」のうち、4時間を担当した。内容は、生育環境別にグループ化した学生の健康観や介護者の語りにみる介護観を、学生自らが抽出する作業のなかで、地域文化の特性と要因を考えるものであった。

10) 高村、渡邊、余語は、それぞれ小平京子助教授、山本洋子講師、永井優子教授と組んで、30時間の「現代保健・看護セミナー」を担当した。「保健・看護セミナー」は、1年生前学期の選択科目で、身近な生活や体験のなかから、保健および

看護につながる問題を見出し、現代の保健および看護が直面する課題に関連づける方法を学習することが目的である。

11) 渡邊は、非常勤講師として、千葉大学看護学部の「環境保健学」の講義を2時間、女子栄養大学保健栄養学科の「情報科学演習」の講義を28時間、社団法人南埼玉郡市医師会久喜看護専門学校「看護研究」の講義および演習を26時間担当した。

12) 余語は、兼任講師として、自治医科大学医学部で「文化人類学入門」および「医療人類学」の講義をそれぞれ20時間、また非常勤講師として、早稲田大学教育学部の「人類学」の講義を28時間、静岡大学人文学部の「考古学各論」の講義を30時間、高知医科大学医学部の「国際看護活動論」の講義を2時間担当した。

### (3) 研究の概要

1) 高村は、厚生労働科学研究(子ども家庭総合研究事業)で、平成14年度から2年間にわたって「ピアカウンセリング・ピアエデュケーションのマニュアル作成とその効果的普及に関する研究」班の主任研究官として、研究を行った。その成果として、ピアカウンセラー養成およびピアカウンセラー養成者養成マニュアルと、ピアカウンセリング事業立ち上げマニュアルの2冊を作成した。また、日本家族教育計画協会の研究補助を受け、セルフエフィカシー介入による健康教育プログラムを研究開発していたが、その成果を「セルフエフィカシーを高めて、主体的な行動変容を支える新健康教育プログラムの実践マニュアル」として完成させた。

2) 渡邊は、日本病院管理学会から研究費の助成を受けて(研究代表者 梅里良正助教授(日本大学医学部医療管理学教室))、他施設の18名の研究者らと「急性期病院における入院症例標準化データセットの開発に関する研究」を行った。

3) 渡邊は、日本病院管理学会から研究費の助成を受けて(研究代表者 信川益明助教授(杏林大学医学部総合医療学))、他施設の18名の研究者らと「保健・医療・福祉の連携推進システム構築の方法論と評価手法の開発に関する研究」を行った。

4) 余語は、アトピー性皮膚炎を病む人々によるインターネット上の「語り」にみる苦悩と日常の実践の分析成果をもとに、病いのナラティブ・データを研究する「インターネット医療民族誌」の

方法論について考察した。その成果は、2004年刊行の『現代のエスプリ』439号に掲載された。

5) 余語は、老年看護学教員との共同研究として、軽度の脳血管障害を発症した前期高齢者のセルフケアについての質的調査を実施した。聞き取り内容の分析成果は、2004年3月刊行の自治医科大学看護学部紀要第2巻に報告として掲載された。

6) 余語は、地域社会の紐帯の要となる祭りの若衆集団内にみる世代間の葛藤とその社会的背景、地域共同の変容について、LPP論や共同体論を援用しながら分析を行った。その成果は、2004年刊行の生活学論叢第9巻に論文として掲載された。

7) 余語は、2003年度より3カ年計画で交付された文部科学省科学研究費補助金基盤研究(B)のテーマ「国民国家において考古学が果たした本質主義的役割の批判的検証」に基づき、研究会議の開催、資料の収集と分析、フィリピン・インドネシアにおける調査および現地研究者との情報交換を実施した。

#### (4) その他

1) 高村は、社団法人日本看護協会看護教育・研究センターの研修会で、看護職のパワーアップシリーズ「キャリアプランと施用在学習」と題して、障害教育の必要性を理解し、自分自身のキャリアのあり方を考えるためセルフエフィカシーとエンパワーメントを高める介入方法について教授した。

2) 高村は、財団法人地域振興財団の現地研修会制度で、みんなでつくる健やかほうふ21「思春期保健対策作戦1」(山口県防府市)および思春期保健におけるピアカウンセリングの理論に関する研修会(宮城県仙台市)をコーディネートし、講師を勤めた。

3) 高村は、日本思春期学会理事および研修・編集委員、日本更年期学会評議員、日本健康教育学会評議員、関東甲信越性教育研究連絡協議会理事、全国性教育研究連絡協議会理事、とちぎ思春期研究会会長などを務め、それぞれ会の活動に従事した。また、第33回全国性教育研究大会の会長として、平成15年8月3日～6日の大会を開催した。

4) 高村は、病院の看護部などで職業人としての自分自身や患者のエンパワーメントを図る人間関係論に関する講演や演習、県健康福祉センター(保健所)・県看護協会・市町村保健センターなどで行ったセルフエフィカシー介入による主体的

な行動変容を支える実践的健康教育のすすめ方についての講演や演習、県・県健康福祉センター(保健所)・市町村保健センターなどで、思春期教育に関する講演、とくにピアカウンセリングの展開について講演を行った。

5) 渡邊は、平成14年度に引き続いて、財団法人日本医療機能評価機構の一般病院B部会員ならびに評価調査者として、第三者病院機能評価事業に関与した。

6) 渡邊は、平成15年11月12日・13日に東京で開催された第32回日本医療福祉設備学会の副会長(学術集会担当)を務めた。

7) 渡邊は、日本医療福祉設備学会理事ならびに事業委員会委員、日本医療情報学会評議員ならびに編集委員会委員、日本診療録管理学会評議員ならびに編集委員会委員、日本病院管理学会評議員などを務めた。

8) 余語は、日本生活学会の評議員を務め、また査読委員として学会誌の編集に携わった。早稲田大学文化人類学会編集委員を務め、会誌の編集およびシンポジウムの企画・運営に携わった。

## 専門基礎

教授 竹田俊明

### (1) スタッフの紹介

教授 竹田俊明

教授 竹田津文俊

### (2) 教育の概要

専門基礎分野は、看護の対象である人間の理解および看護実践の基礎となり、看護学学習の基盤となる科目から構成されている。

1) 竹田は、1学年に対して「人体の構造と機能Ⅰ」、「人体の構造と機能Ⅱ」の授業を担当した。これらは、本学カリキュラムで人間の理解のうちの身体システムに位置づけられ、看護婦教育指定規則のなかの「人体の構造と機能」に関する内容を教授している。科目の目標は、人体の構造、解剖学的構成を学習するとともに、正常な身体機能を営む諸原理を理解することであり、人体機能に関する諸概念を修得することである。「人体の構造と機能Ⅰ」(前期)は90時間で、循環、呼吸、

血液, 消化, 腎・尿排泄, 体液浸透圧と体液pHの調節, 内分泌, 生殖の機能, ホメオスタシスをカバーし, 「人体の構造と機能Ⅱ」(後期)は45時間で, 神経, 感覚, 筋骨格・運動系をカバーした。個別の機能概念を積み上げていくばかりでなく, 統合的理解, 応用ができることを目指した。解剖学オリエンテッドな内容についてはオムニバス形式をとり, 自治医科大学医学部解剖学講座の大河原重雄教授, 竹内公一助手が計24時間(人体の構造と機能Ⅰ), および10時間(人体の構造と機能Ⅱ)を教授した。講義形式を主体としたが, 一部実習, 演習を取り入れた。血液, 呼吸, 体液, 神経・筋の興奮性に関して実験を含む体験学習を, また人体解剖実習として見学による学習を実施した。

2) 竹田津は, 「疾病と病態Ⅰ」を担当した。「疾病と病態Ⅰ」の目標は, 看護に必要な疾病の発症機序とその治療法の理解である。実地臨床に即した内容を核とし, 看護場面において遭遇する種々の患者の病態理解を第一の目的として講義を行った。2003年度後期, 2003年度入学の1年生に対し, まず症状・症候論を中心に, 身体観察, 検査, 診断にいたる過程を総論的に理解する臨床医療総論ともいべき講義を実施した。次に, 疾病と病態の各論にあたる部分では, 血液系, 循環器系, 内分泌系, 免疫系, 代謝系, 消化器系, 呼吸器系, 腎泌尿器系, 脳神経系および電解質の異常の病態生理と治療を中心に講義を行った。講義時間の総計は, 各系2~4時間ずつで合計68時間となった。

3) 竹田津, 竹田は, 2003年度前期, 2002年度入学の2年生に対し, 「医療機器論」1単位15時間の授業(選択, 選択者76名)を行った。看護の場で用いられる医療機器の構造と操作の基本を理解することを目的とした。医学部の松浦克彦講師, 安隆則助手, RIセンター菊地透氏, 附属病院の臨床工学部高橋俊郎技士長(鈴木孝雄技士)が分担した。

4) 1学年に対する「現代保健・看護セミナー」(30時間)では, それぞれ8名の学生を担当し, 指導した。学生の自主性, 自発性を重んじるなかで, 学生自身の保健・看護問題への気づき, 調査, 学習, 討議, 体験など様々な活動をスムーズに進められるよう助言, 支援した。

#### 5) 専門基礎諸科目

この分野の科目および関連の深い科目として,

物理学, 化学, 生物学, 生化学, 薬理学, 疾病と病理(1学年科目, 前期・後期の別は省略)があるが, さらに今年は運動生理学, 疾病と病態Ⅱ, 栄養学, 免疫学, 微生物と感染(2学年科目, 前期・後期の別は省略)が開講された。これらの科目については, 医学部教員(兼任)や附属病院のスタッフ, 学外からの非常勤講師の方々が科目責任教員としての役割を果たされた。

物理学は宇都宮大学工学部電気電子工学科三石孟助教授, 化学は石倉久之自治医科大学名誉教授, 生物学は長野敬自治医科大学名誉教授, 生化学は医学部生化学講座の濱本敏郎教授, 薬理学は医学情報学(薬理学講座)の岸浩一郎助教授, 疾病と病理は医学部病理学講座の齊藤健教授, 運動生理学は医学部総合教育の板井美浩講師, 疾病と病態Ⅱは医学部外科学の永井秀雄教授, 栄養学は附属病院栄養室長の宮本佳代子氏, 免疫学および微生物と感染は医学部細菌・免疫学講座の平井義一教授が担当された。科目によっては, 授業の一部を医学部の該当講座所属教員が分担教授した。また, 生化学では血清タンパクに関する学生実験, 微生物と感染および免疫学では細菌学的, 血清学的な学生実験, 薬理学では薬剤データベースを用いた演習が実施された。

6) 竹田, 竹田津は, 自治医科大学看護短期大学看護学科で3学年の「看護研究Ⅱ」(60時間)を担当した。また, 竹田は同専攻科助産学専攻で「生殖の形態・機能Ⅰ」を8時間担当した。

7) 竹田は, 茨城県結城看護専門学校において非常勤講師として解剖生理学の講義を45時間担当した。

#### (3) 研究の概要

1) 竹田は, ニューラルネットワークの作用と応用についての研究を行い, 宇都宮大学工学部電気電子工学科松岡研究室との共同研究で「ニューラルネットワークを用いた漢方薬処方支援システムの開発」を行った。

2) 竹田津は, 「医療事故におけるインシデントやミスの意義」と「末期疾患患者における延命措置意志決定」の研究を行っている。

#### (4) その他

1) 竹田は, 日本生理学会の評議員および茨城県看護教育財団結城看護専門学校の評議員を務めて

いる。

## 基礎看護学

教授 松田たみ子

### (1) スタッフの紹介

教授 松田たみ子 (2003年4月1日就任)

学歴：1977年3月千葉大学教育学部特別教科(看護)教員養成課程卒業，1986年3月千葉大学大学院看護学研究科修了，1991年3月大阪大学大学院医学研究科修了。職歴：1977年4月千葉大学医学部附属病院看護師，1980年6月東京女子医科大学看護短期大学助手，1991年4月自治医科大学看護短期大学助教授，1993年10月東京医科歯科大学医学部保健衛生学科助教授，2000年10月三重県立看護大学教授。所属学会：日本看護研究学会，日本看護科学学会，日本生理人類学会，日本人間工学会。

助教授 野中 静 (2003年11月17日退職)

講師 里光やよい

講師 大久保祐子

助手 亀田真美

助手 菅野こずえ

助手 豊田省子 (2004年3月31日退職)

### (2) 教育の概要

#### 1) 看護学原論

看護学原論は，1年次前学期，3単位45時間の必修科目である。学習目的は，看護を理解するための共通基盤である看護の概念・目的について，歴史的背景を踏まえて理解し，看護実践の基盤となる人間観・生活感・健康観を養うとともに，看護をとりまく諸事情に関する現実的課題を見据えて将来を展望する能力を養うことである。松田が45時間の講義を担当した。

#### 2) 基礎看護学Ⅰ

基礎看護学Ⅰは，1年次前学期，2単位60時間の必修科目である。学習目的は，看護実践の理論的根拠と問題解決過程を理解し，あらゆる看護実践の共通基盤となる看護技術を学習することである。松田が8時間，野中が16時間，里光が8時間，大久保が6時間の講義を，また22時間の演習を基礎看護学領域全教員で担当した。

#### 3) 基礎看護学Ⅱ

基礎看護学Ⅱは，1年次後学期，2単位60時間の必修科目である。学習目的は，日常生活行動に関連する援助としての看護実践に必要な理論と基本的看護技術について学習することである。環境，ボディメカニクス，清潔，食，排泄などについて，講義と演習を行った。

#### 4) 基礎看護学Ⅲ

基礎看護学Ⅲは，基礎看護学Ⅱに引き続き，2年次前学期で学習する2単位60時間の必修科目である。学習目的は，診断・治療に関連した生活援助としての看護実践に必要な理論と看護技術について学習することである。感染予防，検査時の看護，薬物療法に関する看護，指導技術，死と看護，看護過程等の内容について，講義と演習を行った。

#### 5) 基礎看護学実習Ⅰ

基礎看護学実習Ⅰは，1年次に履修する実習である。10月20日から24日の1週間，1単位の実習を行った。実習目的は，対象により看護を提供するために，医療におけるコミュニケーションの機能を学ぶことである。自治医科大学附属病院の成人系15病棟において，各病棟1名の担当教員を配置して実施した。学生は，入院生活に関係する各部門の見学後，病棟において看護師のとり多様なコミュニケーションの場面に参加し，学習した。また，受け持ち患者とのコミュニケーションを通して，看護者としてのコミュニケーションの難しさを体験しながらも，受け持ち患者の入院生活の状態，入院中の思いを理解することができた。

#### 6) 基礎看護学実習Ⅱ

基礎看護学実習Ⅱは，2年次後学期に，受け持ち患者の看護の実施を通して学ぶ実習である。11月10日から21日までの2週間，2単位の実習を行った。実習の目的は，生活援助技術の実践を学ぶことにあり，「これまで学習した知識を通して，健康障害による日常生活の変化から生じる対象のニーズを理解し，看護を実践するための基礎を学ぶ」とした。自治医科大学附属病院の成人系15病棟において各病棟1名の担当教員を配置して実施した。学生は，実際に患者の看護を行うことの難しさを感じつつも，個別の看護の実施の仕方を学ぶとともに，保健医療チームにおける自らの立場を自覚し，看護職の役割や患者への働きかけの意義について体験を通して学びを深めた。

## 7) 看護学概論

看護学概論は、1年次前学期、1単位15時間の必修科目である。学習目的は、人々の健康における看護の働きに関する概要を理解し、看護学を学ぶための基盤を養うことである。科目責任者を松田が担当し、基礎看護学領域4時間の講義を松田が、精神看護学領域2時間の講義を永井教授が、地域看護学領域2時間の講義を篠澤教授が、母性看護学領域2時間の講義を川崎教授が、小児看護学領域2時間の講義を川口教授が、成人看護学領域2時間の講義を塚越教授が、老年看護学領域2時間の講義を山梨県立看護大学水戸美津子教授が担当した。

## 8) 現代保健・看護セミナー

現代保健・看護セミナーは、15時間の選択科目である。学習目的は、身近な生活や体験の中から、保健および看護につながる問題を見いだす方法を学習することである。松田は、朝野講師（小児看護学）と7人の学生を担当した。野中は、竹田教授（専門基礎）と7人の学生を担当した。里光は、竹田津教授（専門基礎）と7人の学生を担当した。大久保は、篠澤教授（地域看護学）と7人の学生を担当した。学生個々の興味分野についての発表と質疑や身近な生活体験などから感じたことをテーマとし、探求を深めた。担当教員は、討議が実りあるものになるようサポートを心がけた。

## (3) 研究の概要

1) SECIプロセスに基づく看護技術演習による学習者の知識創造の実態を調査し、看護技術演習による学習者の看護実践能力の修得効果を明らかにすることを目的として「SECIプロセスに基づく看護学技術演習の研究」は、本学部1期生99名を対象にした平成14年度の実施状況と平成15年度に収集したデータとあわせて演習の成果を評価した。その成果を第35回医学教育学会大会、日本看護学教育学会第13回学術集会において発表した。

2) 根拠に基づく看護の働きかけ、良い効果を生む看護技術の開発を目指して、「看護技術の生体情報に基づく方法的根拠と生体への影響の解明に関する研究」について平成15年度より文部科学省科学研究費補助金を受け、三重県立看護大学の研究者と共同で行った。その成果は、第29回日本看護研究学会学術集会および第23回日本看護科学学会学術集会において発表した。

## (4) その他

栃木県看護協会臨床指導者講習会において松田は看護論（3時間）、臨床実習の評価（3時間）を、里光は実習指導の原理（6時間）を、大久保は実習指導の評価（6時間）の講義を担当した。

里光は、看護記録セミナーの演習講師を5月に名古屋、9月に札幌で担当した。

大久保は、栃木県看護協会広報出版委員、日本褥瘡学会関東甲信越支部会栃木県支部世話人として活動した。

豊田は、3月に第3回首都圏看護系大学SP・OSCE研究会でSP体験を発表した。10月に壬生町教育委員会主催の介護教室の講師を担当した。また、壬生町長の委嘱により壬生町保健委員会委員を務めた。

## 地域看護学

教授 篠澤倪子

## (1) スタッフの紹介

教授 篠澤倪子

助教授 春山早苗(2003年4月1日就任)

学歴：看護学博士（千葉大学大学院看護学研究科博士後期課程修了）、看護師、保健師。職歴：東京都葛飾区の保健師として勤務後、群馬県立福祉大学校看護学科教員、群馬県立医療短期大学看護学科助手、同専攻科地域看護学専攻講師、助教授を経て着任した。

講師 岸恵美子(2003年4月1日就任)

学歴：人間科学修士、看護師、保健師。職歴：東京都板橋区および北区において保健師として勤務後、自治医科大学看護短期大学講師（地域・老人看護学）を経て着任した。

助手 鈴木久美子

助手 田中幸子(2003年4月1日就任)

学歴：1993年慶應義塾大学文学部卒業、1997年群馬大学医療技術短期大学部看護学科卒業（看護師免許取得）、2001年群馬県立医療短期大学専攻科地域看護学専攻修了（保健師免許取得）、2003年東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻修了（保健学修士）。職歴：群馬大学医学部附属病院、朝日生命糖尿病研究所。

## (2) 教育の概要

1)「地域の生活と健康」は、1年生を対象にした1単位30時間の選択科目で、地域の人々の生活を理解し、健康との関連性について学ぶことを目的としている。85名の学生が受講した。教員3名で担当し、篠澤が16時間、春山が10時間、余語が4時間を担当した。篠澤は、学生が、生活について、身近にとらえることができるように自己の生活活動の振り返りやグループワークを通して、環境の違いにより生活行動が異なることや自己と他者との生活の営みの違いなどを考えさせた。また、地域で生活する高齢者夫婦の暮らしぶり、生活史、生活と健康などのインタビューテープを聞かせて、人生経験、家族との人間関係、地域との交友関係、地域資源の活用などを考えさせた。さらに、地域の老人クラブとの交流会を企画し、高齢者の日常生活、健康状況、生活体験、交友関係、趣味や仕事などの活動状況を聞いてレポートにまとめさせ、グループワークや発表を通して多様な生活や価値観、保健行動などがあることを学ばせた。

春山は、学生が理解しやすいように、またイメージしやすいように具体的な事象を教材に用いて、自然や社会や文化などの環境や人々の慣習や地域社会が人々の健康にどのように影響しているかなどを絵、写真、図を用いて教授した。各講義のあとに関連した課題を出し、主体的に考えたり、学習につなげたりできるようにし、その課題から一つを選び、評価対象となるレポートを提出させ、生まれ育った地域や現在住んでいる地域に目を向け、地域社会生活と健康との関連について考えさせた。

2)「現代保健・看護セミナー」は、1単位30時間で1年生を対象にした選択科目である。篠澤は、9名の学生を担当した。学生は、授業や自分の生活などから興味・関心のあったテーマ「病児、健常児の生活の違い、ボランティア」を深めていくために、自ら「保育園」、「社会福祉協議会」、「おもちゃ図書館」、「児童館」などの施設と交渉して見学体験やボランティア活動を行った。子ども達と接して、障害・疾病の有無に関わらず、あらゆる場で子どもは遊ぶことができ、遊びや人との関わりなどを通して発達していく。ボランティアなどが加わると様々な人々とのかわりが増え、そうした環境の中で豊かな感性が育まれること、ボランティアの役割や責任、利用者の期待などが（一

部ではあるが）学べた。このセミナーで学生各々の考え方、育った背景などの違いなどが理解できた。春山、岸ともに9名の学生を担当し、それぞれに現代保健・看護セミナーを実施した。

3)「看護学概論（健康と生活をまもる看護の役割・機能Ⅱ）」では、1単位15時間のうちの1回を担当した。篠澤は、地域看護の対象や看護活動、ヘルスケアシステムにおける看護の役割などについて、事例やパワーポイント、資料などを用いて授業をすすめた。

4)「地域看護学概論」は、2単位30時間をオムニバスで実施した。篠澤が8時間で、地域看護の歴史、公衆衛生看護活動の展開として、学校看護、産業看護、施策化と看護師の役割を、春山が12時間で、地域看護学の概念、公衆衛生看護活動の展開として地区活動の考え方、手段、ケアシステムなどを、岸が6時間で、在宅看護活動の展開とケアシステム、諸外国の地域看護活動を担当した。うち春山の講義2時間を演習とし、学生を9グループに分け、セミナー形式で地域看護学教員全員により実施した。演習内容は、家庭訪問事例を用いて学生7～8人のグループを教員1人が担当した。地域の中で展開した訪問事例は、疾病、生活、生きがい、家族の健康管理まで含んだ幅広い指導、関係機関・職種が関わる支援、主体的に健康問題に取り組むケースなど学生個々の理解を発表させながら学ばせることができた。事例から基礎看護学実習Ⅱ、成人看護学。の終了後であったため、施設内看護と共通するところと、地域や施設のそれぞれが求めるところの違いまで学べた学生もいた。全体に事例、資料、パワーポイントを作成し、ビデオなどを活用して、地域看護学概論を理解させた。

5)篠澤は、2003年7月14日に国民健康保険で活動する看護職を対象に「訪問指導の展開」について講義した。2003年11月18日に栃木県立石橋高等学校の第5回『一日総合大学』において「地域看護活動」について講義した。なお、第33回全国性的教育大会開催に関わった。

6)春山は、2003年7月に厚生労働省看護研修研究センター看護教員養成課程保健師養成所教員専攻を対象に「地域看護学教育評価」について講義した。また、2003年9～10月に栃木県看護協会実習指導者講習会において「看護論」の講義をした。

7)岸は、2003年12月10日に基幹型在宅介護支援

センターにおいて安足地域の看護職とケアマネジャーを対象に「高齢者虐待の理解と支援」について3時間講義した。2004年1月24日に第8回日本在宅ケア学会(於東京)のシンポジウム「子育て支援の在宅ケア現状と新しい取り組み」において、シンポジストとして虐待ハイリスクの親子のためのグループ活動の実践を発表した。2004年3月19日に埼玉県朝霞市が主催する市民を対象とした介護予防シンポジウムのシンポジストを務めた。2004年3月22日に船橋保健所において、保健師、看護師、ケアマネジャーを対象に「高齢者虐待の予防と支援」について3時間講義した。

8) 鈴木は、南河内町より介護認定審査会委員を委嘱された。

### (3) 研究の概要

1) 自治医科大学看護学部共同研究費による「へき地における看護活動方法の特質ならびに看護管理の特性に関する研究」を篠澤、春山、岸、鈴木、田中により共同研究し、平成15年度は前年度につづく段階の研究として3つの研究を進めた。

①へき地診療所において発展させるべき看護活動を明らかにすることを目的に「へき地診療所において発展させるべき看護活動」としてへき地診療所における看護活動の現状を看護職の認識から調査した。2004年刊行の自治医科大学看護学部紀要第2巻に報告として掲載された。

②平成14年度の研究結果で示唆された、へき地診療所における看護職面接調査を踏まえて全国のへき地診療所看護職を対象を拡大した。さらに、地理的、地域的特性と看護活動との関連や、看護師の認識による今後の看護活動への課題を明らかにし、へき地における看護活動に対する支援体制についての示唆を得ることを目的に全国調査を企画した。全国調査対象を第9次へき地保健医療対策実施要綱で定められた全国の「へき地診療所」のうち歯科診療所などを除いた924施設全てに勤務する看護職とし、平成15年12月から平成16年1月にかけて郵送による自記式質問調査を実施した。回収率は45.6%であった。

③看護活動方法や看護師自身が認識している活動上の課題などからへき地における看護活動の展開方法やへき地診療所看護職へのサポート体制を明らかにすることを目的に、「へき地診療所

における看護活動の展開方法及びへき地診療所看護職のサポート体制作りに関する研究」として先駆的あるいは地域に根ざした特徴的な活動を行っていると考えられる数地区のへき地診療所看護職、その他保健師などに対する追加のインタビューを行った。この研究成果については、第7回日本地域看護学会において「へき地診療所における看護活動の特性と課題(その1)(その2)」として発表予定、また「へき地診療所で働く看護師職の認識による看護活動の特性および職務満足度の関連—へき地診療所看護職の全国調査から—」として第9回日中看護学会に発表予定である。

2) 平成15年度文部科学省科学研究費補助金(若手研究(B))による研究課題「精神障害者の生活を豊かにする市町村における地域ケア体制づくりに関する研究」(研究代表者:春山)に地域看護学領域の教員全員で取り組んだ。2県118市町村の精神障害者支援に関わる保健師活動を郵送による自記式質問紙調査により調べ、市町村において貢献できる精神障害者の生活の豊かさの側面と地域ケア体制づくりに必要な保健師の視点を明らかにした。

3) 厚生労働省科学研究費補助金による「地域の健康危機管理における保健所保健師の機能・役割に関する実証的研究」の一環として、分担研究者である春山を中心に、地域看護学領域の教員全員で「へき地の健康危機管理体制づくりにおける保健所保健師の機能・役割」という研究テーマに取り組み、へき地診療所看護職の健康危機管理に関わる活動の現状と認識を調査した。また、同一環として、春山、田中が「台湾における健康危機管理体制における公衆衛生看護職の役割と教育研修体制」という研究テーマに取り組み、公衆衛生看護師のSARSに関わる活動の調査を台湾において実施した。

4) 国分寺町健康教育「ゆうゆう元気アップ教室」の支援に対して、篠澤、春山、岸、鈴木、田中の地域看護学領域教員全員が、今年度から、継続的に参加し、保健師への支援・協力を行っている。教室への参加観察、住民からの聞き取り、保健師・栄養士との定期的なミーティングを通して保健師とともに住民のヘルスニーズの把握、住民の主体的に健康づくりを行うための自主グループ作りを行ってきた。年度末には「住民の保健行動の

変化」「参加者の健康状態と健康意識の変化」という視点で保健師とともに評価を行った。平成16年度の取り組みに引き継ぐ予定である。

5) 栃木県石橋町健康福祉課の研究に対する支援  
平成15年度石橋町より依頼され、地域看護学領域教員、篠澤、春山、岸、鈴木、田中が全員で取り組み、高齢期の運動習慣が及ぼす心身への影響を明らかにするために、高齢者への質問紙調査とトレーニング室利用者へのフォーカスグループインタビューを実施するための研究指導および協力を行った。

6) 篠澤は、高村寿子教授のピアカウンセリングの評価及びその効果的普及に関する研究に参加した。厚生科学研究子ども家庭総合研究推進事業補助金(研究代表者 高村寿子教授)の交付を受けて、「ピアカウンセリング・ピアエデュケーションのマニュアル作成及び効果的普及に関する研究」の分担研究班長自治医科大学公衆衛生学中村好一教授との共同で「ピアカウンセリングの評価及びその効果的普及に関する研究」を平成14年度に引き続き行っている。今年度は、高校生における性に関するピアカウンセリングの短期効果を評価するため、栃木県下の公立高校の「性に関するピアカウンセリング」受講者に対し、自記式無記名式のアンケート調査をピアカウンセリング受講前後に行った。ピアカウンセリング受講が知識以外でも性に関する意識や人生に対する考え方をはじめとした自己決定能力に関連する要因にも好影響を及ぼしている可能性が示唆された。また、県内6箇所のピアカウンセリング研修を準備するピアカウンセラーの支援に関わる保健所など保健師、養護教諭の支援内容について状況を調査した。

7) 篠澤は、神山幸枝助教授他の老年看護学領域の共同研究「軽度の脳血管障害患者の地域ケアと地域生活(含む家族生活)との関連」に参加した。自宅で生活する軽度の脳血管障害を発症した前期高齢者の脳血管障害発症による身体的・社会的影響、病気の受け止め、セルフケアに対する気持ちとセルフケア行動を明らかにし、脳血管障害を発症した前期高齢者のセルフケアの検討を行った。

8) 篠澤は、川口千鶴教授他の小児看護学領域の共同研究「自治医科大学周辺(1市4町:小山市、国分寺町、南河内町、石橋町、上三川町)における小児看護の課題」に参加した。平成15年度は、対象地域の子どもが救急で受診する救急外来の看護

職と救急外来受診までの経過や受診時の子どもや親/家族の様子などを把握した。また、未就学の子どもたちに接する保育園保育士、幼稚園教諭の2つの調査対象者にプレテストを実施した。

9) 岸は、平成15年度日本看護協会出版会研究助成金を受けて、中年期女性が配偶者を介護することを人生の中でどう意味づけているかを明らかにし、必要な看護援助を検討することを目的として研究を行った。

## 精神看護学

教授 永井優子

### (1) スタッフの紹介

教授 永井優子

助教授 西岡和代

助手 日向朝子

助手 関 澄子

### (2) 教育の概要

当領域では、精神看護学の学士レベルの教育目標として、成長発達段階および健康水準にかかわらず、全ての人(集団を含む)を対象に精神看護の実践に関する基礎的な知識と技術を身につけることを考えている。特に、対象となる人の人権を尊重することや希望を支えることが基盤になるように教育計画を立案している。

永井は、1年次の学生を対象に、前学期に開講される必修科目「看護学概論」では、精神の健康状態と日常生活との関係を理解し、看護の役割と機能について理解することを目標として、第7回の講義「心身の健康を守る看護の役割・機能Ⅱー精神看護学の立場からー」を担当した。1年次後学期には必修科目「成長と発達」において、乳幼児期および学童期・思春期における精神の成長と発達を概観し、その特徴について学習することを目標に、第4回、第5回に「乳幼児期・学童期・思春期・青年期の精神発達の概要」について講義をした。

また、2年次の学生を対象に、前学期に開講される選択科目「ヘルスアセスメント」では、選択した学生を20名程度の小グループにわけて2回にわたって、精神情緒状態の体系とアセスメントするための方法を理解することを目標として、講義

とVTRを用いた演習を担当した。また、必修科目「精神看護学概論」では、精神的な健康について心理・社会・生物学的視点から全人的に理解し、精神的健康にかかわる看護の役割とその理論について理解することを目的に、全14回の講義およびグループワークを行った。本授業では、夏季休業中に、学生の出身地（帰省先）にある精神科病棟、および精神障害者の社会復帰に関連した施設、精神保健福祉領域のセルフヘルプグループのなかから、各1か所以上を見学して、その概要、学び、感想についてレポートすることを課した。

永井と西岡は、助手とともに後学期に開講される必修科目「精神臨床看護学」において、精神障害の回復過程と看護の場に応じた精神的な健康水準の維持・回復の方法とその理論について理解することを目的に、全28回の講義と演習を行った。本科目では、「精神看護学概論」との連続性を意識できるように、夏季休業中課題で得た体験を共有すると共に、精神看護実践に関する課題を考えるグループワークを導入した。約半分は50名ずつのグループに分けて6回はペーパーペイシェントの看護計画を立案する演習に、残りはロールプレイにあてた。精神障害当事者に自分の体験を話そう協力を求めて、学生と討議したり、精神看護実践の経験がある看護職に患者役を演じてもらったりする演習も取り入れている。

さらに、3年次前期に開講する必修科目「精神看護学実習」の準備に多くの時間をかけた。前年度から継続して実習計画策定費を用いて、県内および近隣地域も含めて、精神科病棟を有する医療機関および精神科デイケア、精神障害者共同作業所等の社会復帰に関する地域資源について「精神看護学実習」施設としての適切性と受け入れの可能性について検討し、実習施設を決定した。さらに実習の内容について検討し、「精神看護学実習要項」と各実習施設に応じた事故発生時の対応や指導に関する事項を含む「精神看護学実習マニュアル」を完成させ、各実習施設に説明をして、本科目の目的と内容について周知徹底を図った。

なお、永井は、静岡県立大学看護学部教員と交流をもち、精神看護学領域の看護教員および実践家とともに「精神看護学授業研究会」（年2回程度開催）に関わっている。

### (3) 研究の概要

精神看護学領域では、全発達段階を対象に、身体的・精神的・社会的側面から広く人間の精神的諸問題についてあらゆる場面や状況で援助の方法を追求するため、研究も多岐にわたると考える。しかし、教育を主として活動してきたため、今年度は研究に充当する時間が限定され、学会活動を続けることが主となった。

昨年度にデータを収集した研究課題「自治医科大学附属病院におけるリエゾン精神看護実践の導入に関する基礎的研究－精神看護実践の現状とリエゾン精神看護へのニーズについて－」について、看護学領域共同研究費から153,110円の配分をうけ、データの整理と分析を進めた。

学会活動では、永井は、日本生活指導学会常任理事として、第20回生活指導学会大会（京都市、8月30～31日）において課題研究「生活指導専門職の実務教育と専門性」の企画運営および司会を担当した。また、日本精神保健看護学会の理事として編集委員を担当するほか、第13回日本精神保健看護学会学術集会において第4群「精神看護学実習」の座長を担当した。また、日本看護学教育学会の評議員、日本精神保健看護学会、日本家族看護学会、日本看護学会、日本精神科看護技術協会専門学会（リハビリテーション）の査読委員も担当し、社会的活動の一環として、社会福祉法人こぶしの会の評議員にも就任している。

また、共同研究として、愛知県立看護大学学長研究費「統合失調症患者の初回退院を迎える親の退院への思いと看護職の支援」、文部科学省科学研究費補助金（萌芽研究）「精神科における危険防止のための介入技術の開発に関する研究」を行うほか、家族ケア研究所の客員研究員として精神看護学の立場から家族ケアについて教育研究活動を行っている。

### (4) その他

永井および西岡は、依頼を受けて臨床における看護実践者のための教育活動も行っている。

永井は、本学部が主催する「臨床指導者研修会」において、「臨床実習における人間関係論（講義および演習）」（6時間、3期分）、日本看護協会栃木県支部主催の「平成15年度認定看護管理者ファーストレベル教育」において「看護専門職論」（3時間）、「平成15年度栃木県看護職員実務研修」に

において「リーダーシップ」(6時間, 3会場), および日本精神科看護技術協会主催の「精神科看護実習指導者研修会Ⅱ」において「看護教育課程」(6時間)の講師を担当した。

また、永井は、実習施設の開拓のための打ち合わせにあわせて、佐藤病院看護部から依頼されて「精神看護実践の基本となるもの」(90分)をテーマに職員の研修のために講義を行った。精神看護学実習の準備もかねて、朝日病院の職員を対象に本学「精神看護学実習と臨床スタッフに期待するもの」計5回の講義を担当し、病棟師長を対象としたコンサルテーションを行った。

西岡は、日本看護協会栃木県支部主催の「看護研究の基礎－研究のエビデンスをもとに臨床実践を問い直す方法を学ぶ－」をテーマとした研修会において、会員200名を対象に講師の一人として分担して、講義および演習を2日間行った(9月9日・10日)。ひき続いて、本研修会の参加者から募った20名を対象に、「看護研究の応用1－文献検討から課題を見出す－」研修会においても、同様に講師の一人として演習および個別指導を3日間担当した。初日は看護協会において20名を対象に、2日目、3日目は自治医大を会場として小グループに分けて実施した(2日目:11月17日・19日・25日・28日・平成16年2月2日, 3日目:平成16年2月24日・25日・3月2日・9日)。

さらに西岡は、上都賀総合病院看護部主催「看護研究研修会」において「平成14年度第3回看護研究発表会」(3月15日)の講師, 平成15年度として「看護研究とは－研究計画書の書き方－」(5月2日), 「個別指導」(6月21日), および「看護研究論文の書き方」(8月29日)の3日間講義を担当した。

永井は、看護実践者以外も対象にして、幅広く教育活動を行っている。夏季には、東京大学新領域創成科学研究科教授松原望氏, 東京都精神医学総合研究所主任研究員田上美千佳氏, 静岡県立大学看護学部助教授鈴木啓子氏, 東京女子医科大学助手谷口千絵氏と共同して、看護系大学教員および大学院生等を対象に「看護職のための統計学勉強会(松原セミナー)」(計5回, 会場東京女子医科大学)の企画運営と司会を担当した。

また、永井は、精神保健福祉の関係職や一般に対しても依頼に応じて教育活動を行っている。県東ライフサポートセンターでは2回にわたって

「精神看護のケース記録の方法」(1回2時間)の学習会で講師を担当した。きょうされんの「精神障害者地域生活支援推進セミナー」では、近未来レポート「精神保健福祉先進国の思想と仕組み」をテーマに京都および福島で講義をした(90分)。また、名古屋市主催の「第14回精神障害者家族交流会」では、「家族のストレスを考えてみませんか」をテーマに講演とグループワーク(120分)を行った。

## 母性看護学

教授 川崎佳代子

### (1) スタッフの紹介

教授 川崎佳代子(2004年3月31日退職)

教授 成田 伸

講師 早川有子(2004年3月31日退職)

講師 曾我部美恵子

講師 大原良子(2003年10月1日就任)

資格・学位:助産師, 看護師, 看護学修士(看護管理)。学歴:鹿児島大学医学部附属助産婦学校卒, RMIT大学(豪州)看護学部卒, フリンダース大学(豪州)看護学修士課程修了。職歴:鹿児島市立病院(周産期医療センター産科病棟及びNICU), 広島大学医学部保健学科看護学専攻助手, 同講師。所属学会:日本看護科学学会, 日本看護研究学会, 日本母性看護学会, 日本母性衛生学会ほか。

助手 橋本かおり(2003年4月1日就任)

資格・学位:助産師, 看護師, 保健師, 看護学修士。学歴:広島大学医学部保健学科卒, 広島大学大学院保健学研究科博士前期課程修了。職歴:広島赤十字原爆病院(産婦人科病棟)勤務。所属学会:日本母性衛生学会, 日本母乳哺育学会, 日本母性看護学会。

助手 今村真杏子(2003年4月1日就任, 同年7月29日退職)

資格・学位:助産師, 看護師, 保健師, 看護学学士。学歴:広島大学医学部保健学科卒。職歴:岡山中央病院(産科病棟), 国立病院岡山医療センター(新生児センター)勤務。所属学会:日本母性衛生学会, 日本母乳哺育学会, 日本母性看護学会。

## (2) 教育の概要

## 1) 看護学概論 (1単位:15時間, 1年次前期開講)

15時間のうち, 2時間 (1コマ) を川崎が担当し, 「母性各期における健康問題と看護のはたらきを理解する」を学習課題として, 「妊娠・出産・育児期 (新生児期) を中心に展開される母性看護の働きを学ぶ」ことに視点を置いて講義した。レポートは, 女子学生の場合は「川崎担当部分の授業内容を基礎にして, 母性である自分の心身の健康について検討してみる」, 男子学生の場合は「川崎担当部分の授業内容を基礎にして, 母性のパートナーとしてあるいは父性としての自分の心身の健康について検討してみる」を課題として提出させた。

## 2) 現代保健・看護セミナー

川崎は, 高木初子講師と7名の学生を担当し, 前半は「生活」に焦点を当て, 自分の食生活の振り返り, 摂取量の計算と検討などを行い, 後半は母性看護学実習室で自分たちで立てた献立に従い材料を調達して調理実習を行い, でき上がった食品を試食し, 味・栄養量等の計算と検討を行った。学内で速歩などの運動を行い, 身体的な効果を測定した。その他女性をめぐる社会, 少子化, そして人工妊娠中絶など女性の健康等多岐にわたる内容について文献・VTRを教材にして, 討論を行った。

成田は, 岸恵美子講師と7名の学生を担当し, 前半は自己紹介を兼ねた他の学生に紹介したいことのレジュメを作成し, お互いに紹介しあったり, VTRの鑑賞をしたりした。前半での話し合いのなかから共通に興味のあることとして「健康」というテーマを見出し, 後半はそのテーマに関連した文献を探し, 紹介し合った。また, その結果を冊子としてまとめた。

## 3) 母性看護学概論 (1単位:30時間, 1年生後学期開講)

母性看護学の概念, 対象の特性を理解し, 保健医療システムのなかで果たす看護の役割について理解することを目的に, 母性看護学の概念および機能と役割, 母性の身体的, 心理的, 社会的特性の理解 (以上7コマを川崎が担当), 母性看護の変遷と諸施策, 母性をめぐる生命倫理の現状と課題の理解 (以上5コマのうち4コマを早川が, 1コマを川崎が担当), さまざまな立場にある母性と家族のもつ看護の問題の理解 (以上3コマを大原が

担当) について講義した。

## 4) 母性・小児保健論 (1単位:30時間, 2年生前学期開講)

母性・小児保健にかかわる看護の役割を理解することを目的に, 1回目は, 母子 (母性・小児) 保健の重要性と意義を学習課題として, 母子保健が切り離せない関係にあることを中心に講義し, 2回目は母性と健康生活援助 (以上川崎が担当), 3~4回目は思春期, 5回目は成熟期, 6~7回目は更・老年期における健康増進への援助 (以上成田が担当) を講義した。8~9回は小児保健における看護の役割, 10~11回は小児期に特有な健康問題と援助, 12~14回は, 小児期における健康増進への援助 (以上川口が担当) を講義した。

## 5) 母性臨床看護学 (2単位:60時間, 2年生後学期開講)

妊娠・出産・育児期におこる身体的・心理的・社会的変化について理解し, その中での母性看護の役割を考えることを目的に, 1回目から6回目までは「妊娠の始まりと胎児の成長・発達, 妊婦のからだとこころの変化, 妊婦とその家族の生活, 妊婦とその家族のセルフケア支援を講義した (うち前4回を早川が, 後2回を大原が担当)。7回目「妊娠期の健康問題とその看護」を川崎, 8回目「出産準備教育」を成田が講義した。これと関連して9~10回目には「妊婦とその家族のセルフケア支援の実際と出産準備教育」をテーマにした演習を25人ずつ4グループ編成で4つの内容 (妊婦体験・マタニティビクス・自律訓練法・出産体験) をローテーションする方法で行った。11回目「ハイリスク母子とその家族の看護①」, 12~13回目「分娩の経過と母子における変化」, 14回目「総合周産期母子医療センターの役割とそこにおける母子と家族への支援」を成田が講義し, 15~18回目「褥婦のからだと心の変化, 新生児期の健康問題とその看護, 産褥期の健康問題とその看護」を大原が, 19回目「新生児期の健康問題とその看護」を川崎が, 20~21回目「地域の育児支援」を成田が, 22回目「妊娠・出産・育児期の母子とその家族のアセスメント」を大原が講義した。その後, 23~26回目は25人ずつ4つのグループを編成して「①妊婦・褥婦・新生児のフィジカルアセスメントとケア, ②新生児の家庭での養育」の演習を4内容 (妊婦・褥婦のアセスメント・褥婦の安楽ケア・新生児のアセスメント・家庭での養育) をロ

レーションする方法で行った。

上記内容と平行して、「何らかのリスクを持った母子とその家族の看護」というテーマの課題レポートの作成を行った。学生には、想定したリスクを持つ母子と家族について簡単な事例を設定するように指導した。具体的には、8回目の授業時に成田がレポート課題とレポート作成の手順、作成上の留意事項、提出期限(2月20日)等についてオリエンテーションを行い、1月22日にも再度詳細なオリエンテーションを行った。進め方は、学生を25名ずつ4グループに分け、それぞれ「成田」、「曾我部」、「川崎・早川」、「大原」が担当し、教員からの指導を学生1人当たり最低2回は受けることを義務付けた。また、27～29回「ハイリスク母子とその家族の看護②」の演習を個別指導の時間として活用した。この課題レポートの教育的な目的は、①課題の学習を通じて母子とその家族への看護の理解を深めること、②文献検索とその検討を通じて文献の読み込みと活用法を学ぶこと、③レポートの書き方を学ぶことなどであった。

オリエンテーションから提出までには約4ヶ月の期間があったが、他の実習との関係から、本格的な指導が始まったのは平成16年に入ってからであった。また、他の課題提出との関係から、提出期限の延長を行った。指導の回数は2回の学生もいたが、5回以上研究室に通い、提出最終日になっても書き直すなど、意欲的に取り組む学生もいた。指導によってレポートの内容には確実な変化が見られた。

### (3) 研究の概要

1) 前年度「自治医科大学看護学部共同研究費」で行った「栃木県における母乳育児支援の実態調査」に関しては、文部科学省科学研究費補助金が認可され(基盤研究(C)(2))、「栃木県における母乳育児支援の構築システム開発に関する研究」(研究代表者:川\_佳代子)として研究を継続した。前年度の調査結果の一部を「栃木県における母乳育児支援の実態調査 第1部-母親編」(途中経過報告書)としてまとめるとともに、8題を学会報告した。また、WHOによる「赤ちゃんにやさしい病院」推進運動認定病院等の見学や母乳育児支援に関する各種講習会への参加を通しての情報収集と最新文献の検討を重ね、その結果から「資料集:地域で支える母乳育児(原案)」を作成

した。(川崎、成田、早川、曾我部、大原、橋本、今村)

2) 成田は、平成14～15年度文部科学省科学研究費補助金を受けて「産婦のモニタリングにおける助産婦と産科医の日本型協同作業モデルの開発に関する研究」を行っている(研究代表者:成田伸)。本研究は引き続いて行っているテーマであり、平成15年度には研究成果の中間報告を9月に大阪で開催された世界周産期学会学術集会において発表した。また研究の継続として、助産師による産婦のモニタリングに関して文献検討及び研究結果の分析を行った(成田、橋本、今村)。

3) 早川は、①CAI(Computer Assisted Instruction)の研究、および②褥婦の食べた食品と母乳の味の変化の研究(早川は、平成8年以来自治医科大学大学院研究員として、自治医科大学産婦人科教室の松原茂樹教授の指導を受けている)を行っている。

### (4) その他

1) 川崎は、第44回母性衛生学会および第18回日本母乳哺育学会で座長を担当した。

2) 川崎は、第4回日本母子ケア研究会で座長を担当した。

3) 川崎は、平成15年度栃木県家庭教育振興促進委員を委嘱されて「ほのか～親と子の心を紡ぐために～」および「思春期の子を持つ保護者へ」の作成に携わった。

4) 川崎は、栃木県教育委員会から「第27期栃木県社会教育委員」の委嘱を受けて「家庭と地域の教育力の活性化を図るための方策について」という県政への提言をまとめる作業に携わった(平成14年4月から平成16年3月)。

5) 成田は、平成15年9月24日に開催された平成15年度実習指導者講習会(主催:栃木県、実施機関:社団法人栃木県看護協会)で助産師教育課程の講義を担当した。

6) 成田は、平成15年9月18日・19日に開催された平成15年度認定看護管理者ファーストレベル教育(主催:栃木県看護協会)で「看護サービス提供論」について講義を行った。

7) 成田は、自治医科大学公開講座世話人を担当し、また平成15年8月2日(土)に開催された平成15年度自治医科大学公開講座にて「女性の医療とその展望」のテーマで講演を行った。

8) 成田は、小山市教育委員会が主催するオープンカレッジにおいて「中高年期を健やかに過ごすために」というメインテーマで、10月25日(土)、11月15日(土)の2日間講演を行った。

9) 成田は、11月12日(水)に開催された栃木県が主催する母子保健指導者研修会において「地域で考える母乳育児支援」のテーマで講演を行った。

10) 成田は、5月18日(土)に開催された性と健康を考える女性専門家の会シンポジウム「女性と子どもをタバコから守るために21世紀の環境をつくろう!」の企画に参加し、「看護職とたばこ」という資料集を作成した。

11) 成田は、6月29日(土)に群馬県で開催された第5回日本母性看護学会学術集会において、「母性看護学研究と質的研究方法論」のテーマでワークショップを開催した。

12) 成田は、日本看護管理学会評議員を務め、平成16年2月28日に自治医科大学地域医療情報研修センター中講堂において開催した日本看護管理学会学術活動推進委員会主催の平成15年度看護管理学会セミナー(シンポジウム) in Tochigiの開催を担当した。テーマは「KAIZEN～変革期における質改善をどのようにすすめるか～」で、看護管理を専門とする教授、第一線で働く病院副院長(看護職)、看護部長4名の講師を迎えて開催した。180名を超える参加者があり、大変盛況であった。

13) 成田は、日本看護協会学術誌編集委員会委員、日本看護研究学会編集委員として活動した。

## 小児看護学

教授 川口千鶴

### (1) スタッフの紹介

教授 川口千鶴

講師 加藤晶子

講師 朝野春美

助手 多田敦子(2003年4月1日就任)

学歴: 1997年弘前大学教育学部(特別教科)看護教員養成課程卒業。職歴: 聖路加国際病院小児病棟看護師として勤務の後、2003年自治医科大学看護学部助手として就任。所属学会: 日本小児看護学会、日本小児保健学会。

### (2) 教育の概要

1) 第1学年に「小児看護学概論」15時間のほか、「看護学概論」において小児看護学部分を2時間と「成長と発達」における小児期部分6時間の講義および現代保健・看護セミナー(30時間)を担当した。また、第2学年では「母性・小児保健論」30時間のうち15時間を、「小児臨床看護学」(60時間)を担当した。

### (3) 研究の概要

1) 看護学部共同研究として、「自治医大周辺地域一市四町における小児看護の課題」を明らかにするために、アンケート調査を行った。195名の対象のうち、183名から回答が得られ、アンケート全体の傾向等の分析を行った。

2) 川口が研究分担者となっている文部科学省科学研究費補助金による研究「子どもの在宅ケアのための組織的プログラムの開発」の栃木地区調査として、県南の3施設において、小児科外来を受診する子どもと保護者に対し、生活状況やニーズなどに関するアンケート調査を実施した。

### (4) その他

1) むつみ愛泉幼稚園における就園前幼児およびその保護者を対象とした子育て相談事業「ぴよぴよキッズ育児相談交流会」の企画運営を担当し、9回の交流会を開催した。

2) 小児に関心のある看護職などを対象に、「小児救急の問題点ー看護の立場から」、「小児看護の展望ー小児専門病院のCNSから見た今後」というテーマで2回の勉強会を開催した。

## 成人看護学

教授 塚越フミエ

### (1) スタッフの紹介

教授 塚越フミエ

助教授 小平京子(2004年3月31日退職)

講師 中村美鈴

講師 水野照美(2003年4月1日就任)

学歴: 千葉大学看護学部卒業(看護師免許、保健師免許取得)、千葉大学大学院修士課程修了、千葉大学大学院博士後期課程修了(博士(看護学)取得)。職歴: 国立がんセンター中央病院看護師、

千葉大学看護学部助手(成人看護学)。

講師 山本洋子(2003年4月1日就任)

学歴：日本赤十字看護大学看護学部看護学科卒業，大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻修士課程修了(保健学修士)，大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻博士課程単位取得退学。職歴：名古屋第二赤十字病院勤務，名古屋大学医療技術短期大学部助手，名古屋大学医学部保健学科看護学専攻助手。

助手 村上礼子

助手 友竹千恵

### (2) 教育の概要

「成人看護学概論」は，講義，自己学習とグループ学習によって実施した。試験はレポートと定期試験に加え，グループ学習の成果と参加度によって評価した。その結果，全員が60点以上を取得した。

「成人臨床看護学」は，講義と演習を中心に実施した。講義は，機能障害をもつ人の看護を10の機能障害別に講師以上の教員5名が担当し，演習は，助手を含め，全員で実施した。演習は，患者理解の方法として重要であり，実習で役立つように看護過程の展開に重点をおいて実施した。評価はレポートと試験によって行い，1名の学生を除く学生が60点以上を取得した。

「成人看護学実習Ⅰ」は，自治医科大学附属病院の成人患者が入院する病棟15病棟で実施した。成人看護学の教員全員に加え，学部の他領域の全助手の参加によって3週間実施した。体調不良などにより，実習目標に到達することができなかった学生5名に対しては，春季休業中に補講実習を行った。

附属病院看護師を対象に，臨床指導者研修会の講義を担当した。また，栃木県看護協会の実習指導者講習会の講師を教授と講師が引き受け，実施した。

### (3) 研究の概要

成人看護学の共同研究で調査した糖尿病患者に対するインタビューの結果を分析し，報告書としてまとめた。

本年より「化学療法を続ける通院がん患者の家族員が体験する困難」をテーマに新しい共同研究を開始した。

## 老年看護学

講師 高木初子

### (1) スタッフの紹介

助教授 神山幸枝(2004年3月31日退職)

講師 高木初子

助手 内海香子

### (2) 教育の概要

1) 現代保健・看護セミナー(1単位：30時間，1年生前期開講)

神山は，水野講師と7名の学生を担当した。高木は，川崎教授と7名の学生を担当した。健康な生活を送るための食生活および運動について討議や演習を行った。

2) 老年看護学概論(1単位：30時間，2年生前期開講)

老年看護学の概念・対象および老年看護学の役割とその理論を学ぶことを目的とした。高齢者の定義と老化学説，老年看護学の概念，老年看護の対象の理解，リハビリテーション看護概論，老年期における家族，高齢者の健康問題と老年看護の役割，老年看護学発展の歴史と展望について講義した。老年看護の対象の理解では高齢者の理解を深めるため，講義と演習を取り入れた。

3) 老年臨床看護学(2単位：60時間，2年次後期開講)

健康障害をもつ高齢者が日常生活に適應できるよう，高齢者と家族に応じた看護活動を展開するための方法について学ぶことを目的とした。健康障害と老年看護の基本，加齢に伴って引き起こされる健康障害と看護，疾病や障害に伴う看護，老年期救急医療と看護，感染看護，高齢者ターミナルケア，紙上事例による老年看護過程の展開，痴呆高齢者への看護，倫理的課題と権利擁護について講義した。咀嚼・嚥下障害，排泄障害，身体可動性障害，皮膚障害に伴う看護技術については演習を中心とした。

### (3) 研究の概要

1) 高齢脳血管障害患者のセルフケアと地域生活との関連に関する研究

神山，高木，内海は，軽度脳血管障害を発症した前期高齢者のセルフケアを明らかにするために，脳血管障害を発症し，自宅退院した患者に面接調

査を行った。身体的・社会的影響，病気の受け止め，セルフケアに取り組む気持ち，セルフケア行動の視点で検討した。その結果は第38回日本老年医学会関東甲信越地方会において発表した。また，「平成15年度自治医科大学看護学部紀要」に掲載した。

#### (4) その他

高木は，日本看護協会栃木県支部主催の「実習指導者講習会」において「実習指導の評価」の講師を担当した。

## 研究業績録

## 学 部 長

## (2) 学会発表

1) 清水安子, 内海香子, 野口美和子, 黒田久美子, 横山のぶ子, 鳥飼紀子: A病院糖尿病外来における高齢者インスリン使用者のニーズの実態について. 第8回日本糖尿病教育・看護学会学術集会, 新潟市, 2003年9月27日. (日本糖尿病教育・看護学会誌 7(suppl.);182, 2003)

2) 内海香子, 野口美和子, 清水安子, 湯浅美千代, 黒田久美子, 横山のぶ子, 鳥飼紀子, 大神ヨシ子: 高齢糖尿患者のインスリン使用に伴う生活上の問題状況. 第34回日本看護学会-老年看護-, 宮崎市, 2003年9月18日. (第34回日本看護学会抄録集 104, 2003)

3) 神山幸枝, 高木初子, 内海香子, 余語琢磨, 篠澤侃子, 野口美和子: 高齢脳血管障害患者のセルフケア. 第38回日本老年医学会関東甲信越地方会, 宇都宮市, 2003年9月20日. (第38回日本老年医学会関東甲信越地方会プログラム 12, 2003)

4) 酒井郁子, 野口美和子, 湯浅美千代, 根本敬子, 天津栄子, 佐藤弘美, 大塚真理子, 青木由美恵, 小野幸子, 坂田直美, 島田広美, 吉田千文, 佐瀬真粧美: 介護保険施設のケア方針別にみた痴呆症のある入所者の事故発生状況. 第38回日本老年医学会関東甲信越地方会, 宇都宮市, 2003年9月20日. (第38回日本老年医学会関東甲信越地方会プログラム 11, 2003)

5) 根本敬子, 酒井郁子, 野口美和子, 湯浅美千代, 天津栄子, 佐藤弘美, 大塚真理子, 青木由美恵, 島田広美, 坂田直美, 小野幸子, 吉田千文, 佐瀬真粧美: 介護保健施設におけるリスクマネジメントの実施内容-自由記述からの分析-. 第38回日本老年医学会関東甲信越地方会, 宇都宮市, 2003年9月20日. (第38回日本老年医学会関東甲信越地方会プログラム 11, 2003)

## (3) 著書・総説

1) 野口美和子: 日本における看護系大学院の自己点検評価・外部評価の現状. *Quality Nursing*, 9(5);378-381, 2003.

2) 野口美和子: 高齢者看護のあり方, 腎と透析, 55(5);811-814, 2003.

3) 内海香子, 野口美和子, 清水安子, 湯浅美千代, 黒田久美子, 横山のぶ子, 鳥飼紀子, 大神ヨ

シ子: 高齢糖尿患者のインスリン使用に伴う生活上の問題状況. 第34回日本看護学会論文集-老年看護-, 135-137, 2003.

4) 野口美和子, 金川克子, 小西美智子, 奥井幸子, 上野美智子, 横田 碧, 張替幸枝: 野口美和子編: 新体系看護学20 成人看護概論・成人保健. メヂカルフレンド社 (東京), 2003.

5) 野口美和子編: 新体系看護学21 呼吸機能障害をもつ成人の看護/循環機能障害をもつ成人の看護. メヂカルフレンド社 (東京), 2003.

6) 野口美和子編: 新体系看護学22 消化・吸収機能障害をもつ成人の看護/栄養代謝機能障害をもつ成人の看護. メヂカルフレンド社 (東京), 2003.

7) 野口美和子編: 新体系看護学23 内部環境調節機能障害をもつ成人の看護/身体防御機能障害をもつ成人の看護. メヂカルフレンド社 (東京), 2003.

8) 野口美和子編: 新体系看護学24 脳・神経機能障害をもつ成人の看護/感覚機能障害をもつ成人の看護. メヂカルフレンド社 (東京), 2003.

9) 野口美和子編: 新体系看護学25 運動機能障害をもつ成人の看護/性・生殖機能障害をもつ成人の看護. メヂカルフレンド社 (東京), 2003.

10) 野口美和子監修: 事例で学ぶ成人看護学/1 呼吸機能障害をもつ成人の看護/循環機能障害をもつ成人の看護. メヂカルフレンド社 (東京), 2003.

11) 野口美和子監修: 事例で学ぶ成人看護学/2 消化・吸収機能障害をもつ成人の看護/栄養代謝機能障害をもつ成人の看護. メヂカルフレンド社 (東京), 2003.

12) 野口美和子監修: 事例で学ぶ成人看護学/3 内部環境調節機能障害をもつ成人の看護/身体防御機能障害をもつ成人の看護. メヂカルフレンド社 (東京), 2003.

13) 野口美和子監修: 事例で学ぶ成人看護学/4 脳・神経機能障害をもつ成人の看護/感覚機能障害をもつ成人の看護. メヂカルフレンド社 (東京), 2003.

14) 野口美和子監修: 事例で学ぶ成人看護学/5 運動機能障害をもつ成人の看護/性・生殖機能障害をもつ成人の看護. メヂカルフレンド社 (東京), 2003.

(4) その他

- 1) 野口美和子：これからの看護管理のあり方について．栃木県看護協会平成15年度栃木県看護師長研修会，宇都宮市，2003.
- 2) 野口美和子：成人看護学の教え方を変えよう．新看護学体系メデカルフレンド社講演会，東京・大阪，2003.
- 3) 野口美和子：第7回高齢者介護・看護・医療フォーラム，東京，2003年10月25日.
- 4) 野口美和子：高齢者看護のあり方．日本透析看護学会講演，横浜，2003年11月.
- 5) 野口美和子：治療を受ける痴呆性高齢者の看護についてー現状と今後の方向性ー，高齢者社会福祉法人浴風会高齢者痴呆介護研究・研修東京センターワークショップ，東京，2003年3月6-7日.
- 6) 野口美和子：滋賀県立大学人間看護学部シンポジウム，彦根市，2003年1月24日.

## 一般基礎

(1) 原著論文

- 1) 川瀬良美，森 和代，高村寿子，松本清一：成熟女性のPMSと下腹痛が性役割意識に及ぼす影響について．女性心身医学 8(1);42, 2003.
- 2) 平田乃美，渡部 正，渡邊亮一：少年院在院者による施設環境評価ー日本語版CIESの検討ー．白鷗女子短大論集 28(1);1-13, 2003.
- 3) 余語琢磨：「アトピー」をめぐる病いの語りーインターネット上にみる病者の苦悩と戦術ー．自治医科大学看護学部紀要 1;41-54, 2003.

(2) 学会発表

- 1) 山本 泉，頭川美保，小原ゆり子，岸本久仁，佐々木健，川村和枝，宮崎 栄，高村寿子：主体的な行動変容を支える新健康教育プログラムの実践報告ー第2報 教室に関わるボランティアの効果ー．第12回日本健康教育学会，沖縄．2003年6月28日．(第12回日本健康教育学会講演集 244-245, 2003)
- 2) 川村和枝，佐々木健，宮崎 栄，高村寿子：主体的な行動変容を支える新健康教育プログラムの開発と評価ー第3報 2年間の研究結果と今後の課題ー．第12回日本健康教育学会，沖縄．2003年6月28日．(第12回日本健康教育学会講演集 246-

247, 2003)

- 3) 栗本和佳，小田さつき，桜井真紀，井上ゆみ，佐々木健，川村和枝，宮崎 栄，高村寿子：主体的な行動変容を支える新健康教育プログラムの糖尿病患者への効果．第12回日本健康教育学会，沖縄．2003年6月28日．(第12回日本健康教育学会講演集 248-249, 2003)
- 4) 岸本久仁，山本 泉，佐々木健，川村和枝，宮崎 栄，高村寿子：主体的な行動変容を支える新健康教育プログラムの実践報告ー第1報「あつまれ！フレッシュママ」教室参加者のエンパワメントについてー．第12回日本健康教育学会，沖縄．2003年6月28日．(第12回日本健康教育学会講演集 250-251, 2003)
- 5) 花城清美，中尾佳子，伊集美香，高村寿子：主体的な行動変容を支える新健康教育プログラムの実践報告ーフレッシュママ教室についてー．第12回日本健康教育学会，沖縄．2003年6月28日．(第12回日本健康教育学会講演集 252-253, 2003)
- 6) 篠澤侃子，高村寿子，矢板橋チヅ子：高校生のピアカウンセリングニーズと普及に関する課題．第7回日本地域看護学会学術集会，大阪．2003年6月12日．(第7回日本地域看護学会学術集会講演集 179, 2003)
- 7) 渡辺純一，堀内成子，小陽美紀，江藤宏美，竹内千恵子，片桐麻州美，高村寿子：ピアカウンセラー養成セミナー受講後フォローアップ評価．第5回日本ヒューマン・ケア心理学会大会，東京．2003年9月22日．(第5回日本ヒューマン・ケア心理学会大会発表論文集 51-52, 2003)
- 8) 小林しげ子，梅津美紀，江守真樹，加藤則子，但木恵美子，根本ふみ，奥村 歩，高村寿子：セルフエフィカシイ理論を取り入れた健康教室の取組．第62回日本公衆衛生学会総会，京都．2003年10月24日．(第62回日本公衆衛生学会総会抄録集 260, 2003)
- 9) 梅里良正，前田幸宏，天野定雄，大道 久，鈴木莊太郎，渡邊亮一，有賀 徹，須貝和則，池田俊也，勝木良雄，佐藤正子，山内一信，石川澄，山本修三，佐々木淳一，中村清吾，榎戸克年，三宅 洋，安田信彦：急性期病院における入院症例標準化データ・セットの開発に関する研究．第41回日本病院管理学会学術総会，東京，2003年10月30日．(第41回日本病院管理学会学術総会演題抄録集 127, 2003)

10) 信川益明, 大櫛陽一, 大道 久, 寛 淳夫, 河口 豊, 北村昌之, 白髪昌世, 須古博信, 鈴木 莊太郎, 関田康慶, 寺崎 仁, 長澤 泰, 名和 肇, 橋本廸生, 福田 敬, 舟谷文男, 山内一信, 渡辺一平, 渡邊亮一: 保健・医療・福祉の連携推進システム構築の方法論と評価手法の開発に関する研究. 第41回日本病院管理学会学術総会, 東京, 2003年10月30日. (第41回日本病院管理学会学術総会演題抄録集 130, 2003)

### (3) 著書・総説

1) 余語琢磨: 身体を作る・見せる. 身体から発達を読み解く (根ヶ山光一・川野健治編) 117-136, 新曜社, 2003.

### (4) その他

1) 高橋純子, 川崎佳代子, 渡邊亮一: 産後1ヶ月間の褥婦の悩みとそれに対する個別指導の効果. 自治医科大学看護学部紀要 1;85-94, 2003.

2) 川崎佳代子, 早川有子, 渡邊亮一: 国試合格ゼミナール 母性看護学. ナーシングカレッジ 7(21);105-112, 2003.

3) 渡邊亮一: オーダリングシステム (日本医療経営コンサルタント協会編: 新版 医療経営用語事典) 47, 日本出版, 2003.

4) 渡邊亮一: 医療関係者の一員としての行動 (日本医療情報学会医療情報技師育成事業委員会講習会テキスト編集委員会編: 日本医療情報学会医療情報技師 平成15年度講習会テキスト 医学・医療系) 10, 日本医療情報学会, 2003.

5) 渡邊亮一: 情報システム. 第23回保健活動研修会 (地域社会振興財団), 栃木県, 2003年1月20日.

6) 渡邊亮一: 医療情報学. 診療情報管理通信教育スクーリング (日本病院会), 東京, 2003年10月20日.

## 専門基礎

### (1) 原著論文

1) 小笠原拓郎, 松岡孝栄, 竹田俊明: ニューラルネットワークを用いた漢方薬処方支援GUIシステムの開発. 信学技報, MBE 2002-140 (2003-03);45-48, 2003.

2) Xinh PT, Tri NK, Nagao H, Nakazato H, Taketazu F, Fujisawa S, Yagasaki F, Chen YZ, Hayashi Y, Toyoda A, Hattori M, Sakaki Y, Tokunaga K and Sato Y: Breakpoints at 1p36.3 in three MDS/AML(M4) patients with t(1;3)(p36;q21) occur in the first intron and in the 5' region of MEL1. Genes, Chromosomes and Cancer, 36;313-317, 2003.

### (2) 学会発表

1) 竹田俊明, 村松慎一, 小笠原拓郎, 松岡孝栄, 玉田太朗: ニューラルネットワークを用いた漢方処方支援システム. 第2回自治医科大学シンポジウム, 栃木県南河内町. 2003年7月5日.

2) 竹田俊明, 村松慎一, 玉田太朗, 小笠原拓郎, 松岡孝栄: ニューラルネットワークによる漢方処方支援システム—実用化へ向けて. 日本東洋医学会関東甲信越支部会栃木県部会第11回学術集会, 宇都宮市. 2003年9月7日. (プログラム・抄録集 11, 2003)

### (3) 著書・総説

1) 竹田俊明: 漢方薬の歴史, 展望と診断支援システムの開発. 自治医科大学看護学部紀要, 1;5-16, 2003.

2) 竹田津文俊, 高木初子: 病態生理 内分泌疾患Ⅰ さまざまなホルモンとその働き. 月刊ナーシング, 23(1);100-110, 2003.

3) 竹田津文俊, 高木初子: 病態生理 内分泌疾患Ⅱ 視床下部疾患, 下垂体疾患. 月刊ナーシング, 23(2);88-95, 2003.

4) 竹田津文俊, 大久保祐子: 病態生理 内分泌疾患Ⅲ 甲状腺疾患. 月刊ナーシング, 23(3);92-99, 2003.

5) 竹田津文俊, 大久保祐子: 病態生理 内分泌疾患Ⅳ 副腎疾患. 月刊ナーシング, 23(4);100-107, 2003.

6) 竹田津文俊, 里光やよい: 病態生理 高血圧のメカニズム. 月刊ナーシング, 23(6);100-108, 2003.

7) 竹田津文俊, 中村美鈴: 病態生理 間質性腎炎. 月刊ナーシング, 23(7);100-106, 2003.

## 基礎看護学

### (2) 学会発表

1) 吉岡多美子, 草川好子, 河合富美子, 中村可奈, 渡邊真子, 林 文代, 松田たみ子: 看護技術がもたらす生体への効果の解析—清拭時の摩擦方向が血圧・皮膚血流・皮膚温の変動に及ぼす影響—. 第29回日本看護研究学会学術集会, 大阪. 2003年7月25日. (日本看護研究学会雑誌 26(3);313, 2003)

2) 菅野こずえ, 大久保祐子, 里光やよい, 豊田省子, 亀田真美, 野中 静, 田口ヨウ子: 看護学OSCEにおけるステーション課題の提示に関する分析. 第35回日本医学教育学会大会, 佐賀. 2003年7月25日. (医学教育 34(suppl.);42-43, 2003)

3) 菅野こずえ, 大久保祐子, 里光やよい, 豊田省子, 亀田真美, 野中 静, 田口ヨウ子: 看護学OSCEにおける評価者間の信頼性の検討—信頼性に影響する要因—. 第35回日本医学教育学会大会, 佐賀. 2003年7月25日. (医学教育 34(suppl.);43, 2003)

4) 大久保祐子, 菅野こずえ, 里光やよい, 豊田省子, 亀田真美, 野中 静, 田口ヨウ子: 看護学OSCEにおける評価者間の信頼性の検討—信頼性を高める具体的方策の実験的検証—. 第35回日本医学教育学会大会, 佐賀. 2003年7月25日. (医学教育 34(suppl.);43, 2003)

5) 里光やよい, 大久保祐子, 豊田省子, 菅野こずえ, 亀田真美, 野中 静, 田口ヨウ子: 看護学教育におけるOSCEの有効性. 第35回日本医学教育学会大会, 佐賀. 2003年7月25日. (医学教育 34(suppl.);43-44, 2003)

6) 豊田省子, 亀田真美, 大久保祐子, 里光やよい, 菅野こずえ, 野中 静, 田口ヨウ子: 看護学OSCEにおける模擬患者から学生へのフィードバックの教育的効果. 第35回日本医学教育学会大会, 佐賀. 2003年7月25日. (医学教育 34(suppl.);44, 2003)

7) 亀田真美, 豊田省子, 大久保祐子, 里光やよい, 菅野こずえ, 野中 静, 田口ヨウ子: 看護学OSCEにおける模擬患者から学生へのフィードバックの教育的効果—自己評価表の自由記述分析—. 第35回日本医学教育学会大会, 佐賀. 2003年7月25日. (医学教育 34(suppl.);44, 2003)

8) 若尾ふさ, 野中 静: 看護学の客観的臨床能

力試験における看護ケアステーションの標準模擬患者標準化へのプロセス. 第35回日本医学教育学会大会, 佐賀. 2003年7月25日. (医学教育 34(suppl.);44, 2003)

9) 大学和子, 清水裕子, 野中 静: 基礎看護技術における模擬患者(SP)を導入した客観的臨床能力試験(OSCE)の有効性. 第35回日本医学教育学会大会, 佐賀. 2003年7月26日. (医学教育 34(suppl.);59, 2003)

10) 野中 静, 里光やよい, 豊田省子, 菅野こずえ, 亀田真美, 大久保祐子, 田口ヨウ子: 看護学OSCEにおけるスモールグループ単位による実施の効果—知識創造を促進するグループ形成の調査—. 佐賀. 第35回日本医学教育学会大会, 2003年7月26日. (医学教育 34(suppl.);60, 2003)

11) 大久保祐子, 里光やよい, 豊田省子, 菅野こずえ, 亀田真美, 野中 静, 田口ヨウ子: 標準模擬患者を用いた基礎看護学における客観的臨床能力試験の試み. 日本看護学教育学会第13回学術集会, 長野. 2003年8月3日. (日本看護学教育学会誌 13;235, 2003)

12) 里光やよい, 瀬瀬葉月, 須釜なつみ, 市塚京子, 佐藤淳子, 鈴木照実, 古橋洋子: ナースのキャリアアップと看護師長の関わり. 第23回日本看護科学学会学術集会, 三重. 2003年12月6日. (第23回日本看護科学学会学術集会講演集 354, 2003)

13) 河合富美子, 吉岡多美子, 中村可奈, 草川好子, 林 文代, 松田たみ子: 清拭技術に伴う温刺激の生体への効果に関する基礎的研究—刺激温度, 年齢からの解析—. 第23回日本看護科学学会学術集会, 三重. 2003年12月6日. (第23回日本看護科学学会学術集会講演集 324, 2003)

### (3) 著書・総説

1) 松田たみ子: 糖尿病による食生活の変更. ケーススタディ看護形態機能学 (菱沼典子編). 南江堂 (東京), 207-212, 2003.

2) 松田たみ子: 糖尿病による高血糖. ケーススタディ看護形態機能学 (菱沼典子編). 南江堂 (東京), 213-220, 2003.

3) 竹田津文俊, 大久保祐子: 甲状腺疾患 内分泌疾患3. 月刊ナーシング, 23(3);92-99, 2003.

(4) その他

- 1) 松田たみ子：第29回日本看護研究学会学術集会 (2003年7月) において、「研究成果に基づく清拭技術の臨床応用」というテーマで実演交流会を担当した。
- 2) 松田たみ子：プレゼンテーションの実際 シンポジウムにおける発表。臨牀看護, 29(9);1335-1338, 2003.

## 地域看護学

(1) 原著論文

- 1) 大西洋子, 大澤真奈美, 春山早苗, 照沼栄子：地域看護学教育における家庭訪問実習学びの分析による実習方法の検討, 群馬県立医療短期大学紀要, 10;117-125, 2003.
- 2) 杉本正子, 高石純子, 川越博美, 後閑容子, 春山早苗, 石田千絵, 河原加代子：病院と在宅におけるがん終末期患者のQOL, 東京保健科学学会誌, 6(1);26-37, 2003.
- 3) 大澤真奈美, 春山早苗, 大西洋子, 細谷京子, 照沼栄子, 阿部昌江, 伊藤里加, 長谷川喜代美, 干川なつみ, 土屋由美子, 高柳順子, 高瀬静子：母子保健事業の展開プロセスにおける評価－小児生活習慣病予防健診事業を素材として－, 第33回日本看護学会論文集－地域看護－, 66-68, 2002

(2) 学会発表

- 1) 鈴木久美子, 島田由美子, 篠澤侃子：へき地診療所における看護活動の現状。第6回日本地域看護学会学術集会, 横浜。2003年6月8日。(日本地域看護学会第6回学術集会講演集 156, 2003)
- 2) 田村一美, 篠澤侃子, 高村寿子, とちぎ思春期研究会会員一同：ピアカウンセラー養成講座の実際－とちぎ思春期研究会の取り組みから－社団法人日本家族計画協会創立50周年記念事業。思春期保健相談員学術研究大会, 東京。2003年6月20日。(思春期保健相談員学術研究大会収録 32, 2003)
- 3) 春山早苗, 鈴木久美子, 田中幸子, 岸恵美子, 篠澤侃子：へき地診療所の特徴と期待される看護活動。第62回日本公衆衛生学会, 京都。2003年10月22日。(日本公衆衛生雑誌 50(10);478, 2003)
- 4) 渡辺 至, 中村好一, 篠澤侃子, 高村寿子：

栃木県下の高校生の性に関する特性とピアカウンセリングのニーズ。第62回日本公衆衛生学会, 京都。2003年10月22日。(日本公衆衛生雑誌 50(10);591, 2003)

5) 牛尾裕子, 春山早苗, 石川麻衣, 錦織正子, 松永敏子, 武藤紀子, 宮崎美砂子：地域の健康危機管理事例に基づく保健所保健師の機能・役割 (1報)－自然災害－。第62回日本公衆衛生学会, 京都。2003年10月23日。(日本公衆衛生雑誌 50(10);407, 2003)

6) 武藤紀子, 宮崎美砂子, 牛尾裕子, 春山早苗, 錦織正子, 石川麻衣, 松永敏子：地域の健康危機管理事例に基づく保健所保健師の機能・役割 (2報)－感染症－。第62回日本公衆衛生学会, 京都。2003年10月23日。(日本公衆衛生雑誌 50(10);408, 2003)

7) 錦織正子, 春山早苗, 牛尾裕子, 松永敏子, 武藤紀子, 石川麻衣, 宮崎美砂子：地域の健康危機管理事例に基づく保健所保健師の機能・役割 (3報)－汚染事故－。第62回日本公衆衛生学会, 京都。2003年10月23日。(日本公衆衛生雑誌 50(10);408, 2003)

8) 宮崎美砂子, 春山早苗, 錦織正子, 松永敏子, 武藤紀子, 石川麻衣, 牛尾裕子：地域の健康危機管理事例に基づく保健所保健師の機能・役割 (4報)－事例の比較検討－。第62回日本公衆衛生学会, 京都。2003年10月23日。(日本公衆衛生雑誌 50(10);406, 2003)

9) 福島道子, 青木 豊, 北川明子, 瀧澤利行, 津波古澄子, 岸恵美子：被虐待児ケアとしての「遊び」の活用可能性。日本地域看護学会, 横浜。2003年6月7日。(日本地域看護学会第6回学術集会講演集 67, 2003)

10) 田中幸子, 山崎喜比古：ケアに携わる職員の「働きやすさ」の概念化の試み－東京都老人福祉施設の介護職・看護職・生活相談員のデータから－。第29回日本保健医療社会学会大会, 京都。2003年5月18日。(保健医療社会学論集 14;特別号, 2003)

(3) 著書・総説

- 1) 鈴木久美子：脳・神経機能障害をもつ成人の看護 第1章 脳・神経機能障害と日常生活。新体系看護学24 成人看護学⑤ 脳・神経機能障害をもつ成人の看護／感覚機能障害をもつ成人の看

護(野口美和子編). メヂカルフレンド社(東京), 4-31, 2003.

2) 鈴木久美子, 塚越フミエ, 内海香子, 小曾根佳枝, 弘田智香: 脳・神経機能障害をもつ成人の看護 第4章 脳・神経機能障害をもつ患者の看護. 新体系看護学24 成人看護学⑤ 脳・神経機能障害をもつ成人の看護/感覚機能障害をもつ成人の看護(野口美和子編). メヂカルフレンド社(東京), 100-149, 2003.

3) 友竹千恵, 内海香子, 鈴木久美子: pH調節機能障害をもつ成人の看護 第3章 pH調節機能障害の検査・治療に伴う看護. 新体系看護学23 成人看護学④ 内部環境調節機能障害をもつ成人の看護/身体防御機能障害をもつ成人の看護(野口美和子編). メヂカルフレンド社(東京), 80-104, 2003.

4) 島田由美子, 内海香子, 鈴木典子, 小松崎香, 小貫栄子, 鈴木久美子, 高岡恵美子: 身体防御機能障害をもつ成人の看護 第4章 身体防御機能障害をもつ患者の看護. 新体系看護学23 成人看護学④ 内部環境調節機能障害をもつ成人の看護/身体防御機能障害をもつ成人の看護(野口美和子編). メヂカルフレンド社(東京), 320-359, 2003.

#### (4) その他

1) 篠澤侃子: 特別報告 自治医科大学看護学部の地域看護学教育. 自治医科大学看護学部年報, 1;7-9, 2003.

2) 篠澤侃子: 生徒自らが「性と生」を仲間に伝えてあげたいと・・・栃木県下保健所で実施のピアカウンセリング, 家族と健康, (社)日本家族計画協会, 7, 2003.

3) 中村好一, 篠澤侃子, 渡辺 至: ピアカウンセリング・ピアエデュケーションのマニュアル作成及び効果的普及に関する研究ーピアカウンセリングの評価及びその効果的普及に関する研究ー. 平成14年度厚生科学研究(子ども家庭総合研究事業)報告書, 2003.

4) 二渡玉江, 中西陽子, 春山早苗, 林 陸郎, 下村洋之助, 廣町佐智子: 虚血性心疾患患者の運動を中心とした保健指導プログラムの開発と効果の検討. 平成12年度～14年度科学研究費補助金(基礎研究(C)(2))研究成果報告書, 2003.

5) 春山早苗: 豪雨災害における保健所保健師の

機能・役割ー東海豪雨災害と群馬県北部集中豪雨災害における保健師の活動実態と課題からー. 厚生労働科学研究費補助金(健康科学総合研究事業)地域の健康危機管理における保健所保健師の機能・役割に関する実証的研究 平成14年度総括・分担研究報告書, 13-22, 2003.

6) 日本看護協会出版会『保健婦・士国家試験』編集委員会(石井康子, 鶴田来美, 春山早苗, 藤田美江): 2004年対応版 保健師国家試験 問題・解答・解説. 日本看護協会出版, 10-13, 19-20, 2003.

7) 福島道子, 青木 豊, 北川明子, 瀧澤利行, 津波古澄子, 岸恵美子: 被虐待児の遊び方とグリーフィングに関する研究 平成14年度児童環境づくり等総合調査研究事業報告書. こども未来財団, 2003.

8) 福島道子, 青木 豊, 北川明子, 瀧澤利行, 津波古澄子, 岸恵美子: 被虐待児ケアへの「遊び」の活用. 生活教育, 47(1);7-13, 2003.

9) 田中幸子, 山崎喜比古: 看護職のストレスマネジメントーストレスサーリダクションを中心にー. INR, 110, 4-26-2, 32-37, 2003.

## 精神看護学

#### (3) 著書・総説

1) 西岡和代: 精神保健と地域精神保健. 保健・医療・福祉系学生のための臨床精神医学(根岸敬矩, 土澤健一編著). 医学出版社(東京), 257-282, 2003.

#### (4) その他

1) 永井優子: 生活指導に関する専門職を養成するための基礎教育における倫理教育ー看護学実習における倫理および人権擁護に関する指導についてー, 生活指導研究, 20;50-69, 2003.

2) 日向朝子, 関 澄子: 看護学生の精神障害者に対するイメージの変化ー講義で精神障害者と自由に話すことを通してー, 自治医科大学看護学部紀要, 1;79-84, 2003.

## 母性看護学

### (1) 原著論文

- 1) 曾我部美恵子, 川崎佳代子: 人工妊娠中絶における意思決定に関連する要因の分析. 自治医科大学看護学部紀要, 1;29-39, 2003.
- 2) 高橋純子, 川崎佳代子, 渡邊亮一: 産後1ヶ月間の褥婦の持つ悩みに対する個別指導の評価. 自治医科大学看護学部紀要, 1;85-94, 2003.
- 3) 中野美佳, 工藤美子, 正木美恵, 安成智子, 玉石桂子, 成田 伸: 海外における水中出産に関する研究の現状分析. 日本母性看護学会誌, 3(1);47-56, 2003.
- 4) 成田 伸: 母親から見た栃木県内における母乳育児支援の実態—1歳6ヶ月時点での振り返りから—. 第2回自治医科大学シンポジウムポスターセッション記録集, 53, 2003.
- 5) 成田 伸: 看護における教育と実践のユニフィケーション. 自治医科大学看護学部年報, 1;11-13, 2003.

### (2) 学会報告

- 1) Sakanashi K., Narita S., Tsuru S., Saito I., Murakami M., Nakane N.: The present condition of perinatal care during the day and at night in Japanese hospitals. The 6<sup>th</sup> World Congress of Perinatal Medicine, Osaka. Sep.13,2003. (Journal of Perinatal Medicine 31(suppl.1);195, 2003)
- 2) Ohara R., Rudge T., Cuthberston L., Tsuru S., Narita S., Moriyama M., Ando Y.: The first time fathers' experience of premature infants in the early neonatal period. The 6<sup>th</sup> World Congress of Perinatal Medicine, Osaka. Sep.13,2003. (Journal of Perinatal Medicine 31(suppl.1);264, 2003)
- 3) Saito I., Narita S., Sakanashi K., Tsuru S., Murakami M., Nakane N., Akayama M.: A comparison of the number of health professionals (by type) caring live birth. The 6<sup>th</sup> World Congress of Perinatal Medicine, Osaka. Sep.13,2003. (Journal of Perinatal Medicine 31(suppl.1);268, 2003)
- 4) Narita S., Sakanashi K., Saito I., Tsuru S., Nakane N., Murakami M., Hashimoto K., Imamura M.: Collaboration between obstetricians and nurse-midwives in perinatal medicine in Japan. The 6<sup>th</sup> World Congress of Perinatal Medicine, Osaka.

Sep.13,2003. (Journal of Perinatal Medicine 31(suppl.1);270, 2003)

- 5) Tsuru S., Narita S., Sakanashi K., Saito I., Murakami M., Nakane N., Akayama M.: Research on determining factors concerning the total amount of payment at discharge for trans-vaginal childbirth cases. The 6<sup>th</sup> World Congress of Perinatal Medicine, Osaka. Sep.13,2003. (Journal of Perinatal Medicine 31(suppl.1);270, 2003)
- 6) 川崎佳代子, 成田 伸, 早川有子, 曾我部美恵子, 橋本かおり, 今村真杏子, 富田真理子, 木下珠希, 竹中 美, 佐藤郁夫, 松原茂樹: 栃木県における母乳育児支援の実態 (第1報) —産科医及び小児科医の視点から—. 第44回日本母性衛生学会, 宇都宮. 2003年10月9日. (母性衛生 44(3);241, 2003)
- 7) 早川有子, 成田 伸, 川崎佳代子, 曾我部美恵子, 橋本かおり, 今村真杏子, 富田真理子, 木下珠希, 竹中 美, 佐藤郁夫, 松原茂樹: 栃木県における母乳育児支援の実態 (第2報) —看護職の視点から—. 第44回日本母性衛生学会, 宇都宮. 2003年10月9日. (母性衛生 44(3);241, 2003)
- 8) 曾我部美恵子, 成田 伸, 川崎佳代子, 早川有子, 橋本かおり, 今村真杏子, 富田真理子, 木下珠希, 竹中 美, 佐藤郁夫, 松原茂樹: 栃木県における母乳育児支援の実態 (第3報) —保健センターでの乳児健診の視点から—. 第44回日本母性衛生学会, 宇都宮. 2003年10月9日. (母性衛生 44(3);241, 2003)
- 9) 橋本かおり, 成田 伸, 川崎佳代子, 曾我部美恵子, 早川有子, 今村真杏子, 富田真理子, 木下珠希, 竹中 美, 佐藤郁夫, 松原茂樹: 栃木県における母乳育児支援の実態 (第4報) —地域でのサポートの視点から—. 第44回日本母性衛生学会, 宇都宮. 2003年10月9日. (母性衛生 44(3);241, 2003)
- 10) 木下珠希, 富田真理子, 成田 伸, 川崎佳代子, 早川有子, 曾我部美恵子, 橋本かおり, 今村真杏子, 竹中 美, 佐藤郁夫, 松原茂樹: 栃木県における母乳育児支援の実態 (第5報) —乳児保育の視点から—. 第44回日本母性衛生学会, 宇都宮. 2003年10月9日. (母性衛生 44(3);241, 2003)
- 11) 富田真理子, 木下珠希, 成田 伸, 川崎佳代子, 早川有子, 曾我部美恵子, 橋本かおり, 今村

真杏子, 竹中 美, 佐藤郁夫, 松原茂樹: 栃木県における母乳栄養確立状況—1歳6ヶ月時点での振り返りから—。第44回日本母性衛生学会, 宇都宮。2003年10月9日。(母性衛生 44(3);236, 2003)

12) 成田 伸, 水流聡子, 大原良子, 中根直子, 赤山美智代, 村上睦子, 橋本かおり, 今村真杏子, 坂梨 薫, 斎藤いずみ: 助産師が行う分娩時モニタリングケアの特定の試み。日本医療情報学会第4回看護情報研究会, 広島。2003年7月12日。

13) 成田 伸, 水流聡子, 大原良子, 中根直子, 赤山美智代, 村上睦子, 橋本かおり, 今村真杏子, 坂梨 薫, 斎藤いずみ: 日本の産科医療における助産師と産科医との共同作業の実態—中規模以上の病院に対する全国調査結果から—。第7回日本看護管理学会年次大会, 横浜。2003年8月22日。

14) 坂梨 薫, 水流聡子, 成田 伸, 斎藤いずみ, 村上睦子, 中根直子: 分娩に関わる費用実態とその背景要因—全国300床以上の病院の調査分析から—。第7回日本看護管理学会年次大会, 横浜。2003年8月22日。

15) 斎藤いずみ, 坂梨 薫, 成田 伸, 水流聡子, 村上睦子, 中根直子: 分娩室の看護管理者が考える方針と戦略。第7回日本看護管理学会年次大会, 横浜。2003年8月22日。

16) 成田 伸, 橋本かおり, 今村真杏子, 坂梨 薫, 水流聡子, 大原良子, 斎藤いずみ, 村上睦子, 赤山美智代, 中根直子: 日本の300床以上の病院における産科医療体制と帝王切開の現状。第44回日本母性衛生学会, 宇都宮。2003年10月10日。(母性衛生 44(3);157, 2003)

17) 斎藤いずみ, 坂梨 薫, 成田 伸, 水流聡子, 村上睦子, 中根直子: 分娩時データの情報管理に関する基礎調査。第44回日本母性衛生学会, 宇都宮。2003年10月10日。(母性衛生 44(3);157, 2003)

18) 曾我部美恵子, 川崎佳代子, 成田 伸, 早川有子, 橋本かおり, 今村真杏子, 富田真理子, 木下珠希, 竹中 美, 佐藤郁夫, 松原茂樹: 母親から見た栃木県内における母乳育児支援の実態—1歳6ヶ月時点での振り返りから—。第28回栃木県母性衛生学会, 宇都宮。2003年6月1日。(栃木県母性衛生とちば 30;49-52, 2003)

### (3) 著書

1) 中村美鈴, 川崎佳代子: 子宮筋腫患者の看護。

ナーシングカレッジ2003年5月別冊 疾患理解とケアプランのための看護過程セミナー 根拠から学ぶ病態生理と看護プロセス, 医学芸術社, 2003.  
2) 日向朝子, 曾我部美恵子, 神田貴代: 性・生殖機能障害をもつ成人の看護 第2章 性・生殖機能障害の把握と看護。新体系看護学25 成人看護学⑥ 運動機能障害をもつ成人の看護/性・生殖機能障害をもつ成人の看護 (野口美和子編)。メヂカルフレンド社 (東京), 204-236, 2003.

3) 神山幸枝, 日向朝子, 曾我部美恵子, 下条玲江: 性・生殖機能障害をもつ成人の看護 第4章 性・生殖機能障害をもつ患者の看護。新体系看護学25 成人看護学⑥ 運動機能障害をもつ成人の看護/性・生殖機能障害をもつ成人の看護 (野口美和子編)。メヂカルフレンド社 (東京), 268-295, 2003.

4) 曾我部美恵子, 斎藤ゆみ他96名, : F新生児の看護手技/新生児の保清法。第一線のナースと保健師のための実践臨床看護手技ガイド—手順に沿って図解した手技のすべて— (第2版) (和田功編), 文光堂 (東京), 911-925, 2003.

5) 成田 伸 (訳): 研究への消費者の関与。助産学研究入門—エビデンスにもとづく実践をめざして— (前原澄子監訳)。医学書院 (東京), 128-150, 2003.

### (4) その他

1) 坂梨 薫, 水流聡子, 成田 伸, 斎藤いずみ: 助産サービスの質とプライシングに関する実証研究。平成13 - 14年度文部科学省科学研究費補助金研究報告書 (基盤研究(C)(1)), 2003.

2) 前原澄子, 田邊美智子, 交野好子, 野村紀子, 成田 伸, 石村由利子, 住本和博: 母性看護学・助産学領域における教育教材の開発—一周産期診断・分娩介助モデルのAugmented Realityの開発と教育効果—。平成12-14年度文部科学省科学研究費補助金研究報告書 (基盤研究(A)(1)), 2003.

3) 成田 伸, 川崎佳代子, 早川有子, 曾我部美恵子, 橋本かおり, 今村真杏子, 木下珠希, 富田真理子, 竹中 美, 佐藤郁夫, 松原茂樹: 栃木県における母乳育児支援の実態調査 (第1部) 母親編。平成14年度自治医科大学看護学領域共同研究報告書・平成15-17年度文部科学省研究中間報告書 (基盤研究(C)(2)), 2003.

## 小児看護学

### (1) 原著論文

1) 澤田和美, 川口千鶴, 奥野順子, 石川眞里子, 日沼千尋, 谷水敏子, 平川 歩: 乳幼児の事故に関する要因. 小児保健研究, 62(5):576-583, 2003.

### (2) 学会発表

1) 及川郁子, 平林優子, 横山由美, 川口千鶴, 島田珠美: 小児の訪問看護サービスに関する医療者の認識. 日本小児看護学会第13回学術集会, 千葉. 2003年7月26日. (日本小児看護学会講演集 84-85, 2003)

2) 朝野春美, 佐久間亜希子: 固定チームナーシングと学生の実習指導. 平成15年固定チームナーシング全国研究集会, 神戸. 2003年9月7日. (平成15年固定チームナーシング全国研究集会資料集 48-1~2, 2003)

3) 関森みゆき, 奥野順子, 白井雅美, 日沼千尋, 澤田和美, 川口千鶴, 石川眞里子: 乳幼児の事故と予防に関する調査—事故と家庭における安全対策との関連から—. 第50回日本小児保健学会, 鹿児島. 2003年11月15日. (第50回日本小児保健学会講演集 320-321, 2003)

### (3) 著書・総説

1) 加藤晶子, 斎藤ゆみ: 新生児の呼吸管理法. 第一線ナースと保健師のための実践臨床看護手技ガイド—手順に沿って図解した手技のすべて (第2版) (和田 攻編). 文光堂 (東京), 907-910, 2003.

2) 加藤晶子, 斎藤ゆみ: 保育器の看護手技. 第一線ナースと保健師のための実践臨床看護手技ガイド—手順に沿って図解した手技のすべて (第2版) (和田 攻編). 文光堂 (東京), 926-931, 2003.

3) 朝野春美, 加藤晶子, 菊池睦子, 布宮 伸: 小児看護に必要な看護数値. ポケット版最新ケアに生かす看護数値の事典 (初版) (布宮 伸, 中村好一, 菊池睦子編). 照林社 (東京), 316-354, 2003.

### (4) その他

1) 及川郁子, 平林優子, 川口千鶴, 横山由美, 蔵屋千秋, 鈴木里利: 慢性疾患をもつ子どもと家

族の在宅ケアの質の確保のためのプログラム開発. 平成11年度~平成13年度文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究(C)(2)研究成果報告書), 2003.

2) 鈴木千衣, 小原美江, 及川郁子, 平林優子, 横山由美, 鈴木里利, 川口千鶴, 石井由美: 外来通院する慢性疾患児の治療及び日常生活の現状と外来看護に対する家族の認識. 福島県立医科大学看護学部紀要, 5:57-68, 2003.

## 成人看護学

### (1) 原著論文

1) Eiko Sato, Isao Ohsawa, Jun Kataoka, Miki Miwa, Fumie Tsukagoshi, Juichi Sato, Yoshiharu Oshida, Yuzo Sato: Socio-Psychological Problems of Patients with Late Adolescent Onset Type 1 Diabetes—Analysis by Qualitative Research—. Nagoya Journal of Medical Science, 66(1・2):21 - 29, 2003.

2) 中村美鈴, 鈴木英子, 福山清蔵: 看護師のゆらぐ場面とそのプロセスに関する研究. 自治医科大学看護学部紀要, 1:17 - 27, 2003.

### (2) 学会発表

1) Masako Shibuya, Misuzu Nakamura, Fumiko Shinkai, Fusako Kakikawa: Care support system in changing process for uterine cancer patients with difficulties of daily living function after radical hysterectomy. First International Conference Japanese Society of Cancer Nursing, Osaka. Feb.6-7, 2003. (Abstracts 67, 2003)

2) 水野照美, 佐藤禮子: がん性疼痛があり通院治療を続けるがん患者の苦痛の様相. 第8回日本緩和医療学会, 千葉. 2003年6月27日. (第8回日本緩和医療学会総会講演抄録集 8:55, 2003)

3) 村上礼子, 中村美鈴, 友竹千恵, 小平京子, 塚越フミエ: 外来通院する糖尿病患者の実態—通院間隔と血糖コントロールとの関連—. 自治医科大学シンポジウム, 栃木. 2003年7月5日. (平成15年度第2回自治医科大学シンポジウムポスターセッション記録集 54, 2003)

4) 水野照美, 佐藤禮子: がん性疼痛があり通院治療を続ける患者の苦痛への取り組み. 第23回日本看護科学学会学術集会, 三重. 2003年12月6日.

(第23回日本看護科学学会学術集会講演集 297, 2003)

5) 千葉京子, 中村美鈴, 長江弘子: 大腿骨頸部骨折術後高齢者の「生活の折り合い」に関する研究—退院1年後の心的プロセス—. 日本看護科学学会, 三重. 2003年12月7日. (第23回日本看護科学学会学術集会講演集 271, 2003)

6) 村上礼子, 中村美鈴, 友竹千恵, 小平京子, 塚越フミエ: 外来に通院する糖尿病患者の実態—通院間隔と血糖コントロール状況との関連—. 第23回日本看護科学学会, 三重県. 2003年12月7日. (第23回日本看護科学学会学術集会講演集 501, 2003)

### (3) 著書・総説

1) 内海香子, 岸恵美子, 山田恵子, 友竹千恵, 島田由美子: 呼吸機能障害をもつ成人の看護 第3章 呼吸機能障害の検査・治療に伴う看護. 新体系看護学21 成人看護学” 呼吸機能障害をもつ成人の看護／循環機能障害をもつ成人の看護 (野口美和子編). メヂカルフレンド社 (東京), 52-88, 2003.

2) 内海香子, 茂呂悦子, 渡井 恵, 友竹千恵, 島田由美子, 小松崎香: 呼吸機能障害をもつ成人の看護 第4章 呼吸機能障害のある患者の看護. 新体系看護学21 成人看護学” 呼吸機能障害をもつ成人の看護／循環機能障害をもつ成人の看護 (野口美和子編). メヂカルフレンド社 (東京), 90-116, 2003.

3) 山田恵子, 塚越フミエ, 辻村史子: 循環機能障害をもつ成人の看護 第2章 循環機能障害の把握と看護. 新体系看護学21 成人看護学② 呼吸機能障害をもつ成人の看護／循環機能障害をもつ成人の看護 (野口美和子編). メヂカルフレンド社 (東京), 152-171, 2003.

4) 山田恵子, 上野久子, 友竹千恵: 循環機能障害をもつ成人の看護 第4章 循環機能障害のある患者の看護. 新体系看護学21 成人看護学② 呼吸機能障害をもつ成人の看護／循環機能障害をもつ成人の看護 (野口美和子編). メヂカルフレンド社 (東京), 208-233, 2003.

5) 塚越フミエ, 中村美鈴, 野沢京子, 中山鈴子: 消化・吸収機能障害をもつ成人の看護. 新体系看護学22 成人看護学③ 消化・吸収機能障害をもつ成人の看護／栄養代謝機能障害をもつ成人

の看護 (野口美和子編). メヂカルフレンド社 (東京), 3-161, 2003.

6) 友竹千恵, 豊田省子: 体温調節機能障害をもつ成人の看護 (第1章～第3章). 新体系看護学23 成人看護学④ 内部環境調整機能障害をもつ成人の看護／身体防御機能障害をもつ成人の看護 (野口美和子編). メヂカルフレンド社 (東京), 2-39, 2003.

7) 塚越フミエ, 鯨美千子, 大谷佳子: 内部環境調整機能障害をもつ成人の看護 第4章 体温調節機能障害をもつ患者の看護. 新体系看護学23 成人看護学④ 内部環境調整機能障害をもつ成人の看護／身体防御機能障害をもつ成人の看護 (野口美和子編). メヂカルフレンド社 (東京), 42-55, 2003.

8) 小平京子, 島田由美子: pH調節機能障害をもつ成人の看護 (第1章, 第2章). 新体系看護学23 成人看護学④ 内部環境調整機能障害をもつ成人の看護／身体防御機能障害をもつ成人の看護 (野口美和子編). メヂカルフレンド社 (東京), 59-77, 2003.

9) 友竹千恵, 内海香子, 鈴木久美子: pH調節機能障害をもつ成人の看護 第3章 pH調節機能障害の検査・治療に伴う看護. 新体系看護学23 成人看護学④ 内部環境調整機能障害をもつ成人の看護／身体防御機能障害をもつ成人の看護 (野口美和子編). メヂカルフレンド社 (東京), 80-104, 2003.

10) 塚越フミエ, 福田越子, 石川裕子: pH調節機能障害をもつ成人の看護 第4章 pH調節機能障害をもつ患者の看護. 新体系看護学23 成人看護学④ 内部環境調整機能障害をもつ成人の看護／身体防御機能障害をもつ成人の看護 (野口美和子編). メヂカルフレンド社 (東京), 106-120, 2003.

11) 小平京子, 友竹千恵, 豊田省子: 血糖調節機能障害をもつ成人の看護 (第1章, 第2章). 新体系看護学23 成人看護学④ 内部環境調整機能障害をもつ成人の看護／身体防御機能障害をもつ成人の看護 (野口美和子編). メヂカルフレンド社 (東京), 123-148, 2003.

12) 塚越フミエ, 鯨美千子, 大谷佳子: 血糖調節機能障害をもつ成人の看護 第4章 血糖調節機能障害をもつ患者の看護. 新体系看護学23 成人看護学④ 内部環境調整機能障害をもつ成人の看護

護／身体防御機能障害をもつ成人の看護 (野口美和子編). メヂカルフレンド社 (東京), 185-202, 2003.

13) 小平京子, 島田由美子, 熊丸弘美: 身体防御機能障害をもつ成人の看護 (第1章, 第2章). 新体系看護学23 成人看護学④ 内部環境調整機能障害をもつ成人の看護／身体防御機能障害をもつ成人の看護 (野口美和子編). メヂカルフレンド社 (東京), 206-271, 2003.

14) 鈴木久美子, 塚越フミエ, 高木初子, 内海香子, 小曾根佳枝, 弘田智香: 脳・神経機能障害をもつ成人の看護 (第2章～第4章). 新体系看護学24 成人看護学⑤ 脳・神経機能障害をもつ成人の看護／感覚機能障害をもつ成人の看護 (野口美和子編). メヂカルフレンド社 (東京), 33-149, 2003.

15) 塚越フミエ, 池田律子, 境野博子, 福嶋安子, 渡邊美智子, 石崎美知子: 感覚機能障害をもつ成人の看護. 新体系看護学24 成人看護学⑤ 脳・神経機能障害をもつ成人の看護／感覚機能障害をもつ成人の看護 (野口美和子編). メヂカルフレンド社 (東京), 151-351, 2003.

16) 中村美鈴: 高齢患者が持つリスクを把握した周手術期看護 第5回－術後せん妄に関する高齢患者の手術と看護－. 月刊かんごきろく, 12(10);75-81, 2003.

17) 島村忠義, 竹中文良, 菅野一男, 日吉 徹, 大野 誠, 中村美鈴, 千葉京子: 糖尿病患者における血糖値の変化とタイプA, 社会階層, 生活習慣, 病状と治療方法に関する研究. 日本赤十字看護大学紀要, 17;46-56, 2003.

18) 村上礼子, 中村美鈴, 友竹千恵, 小平京子, 塚越フミエ: 外来に通院する糖尿病患者の実態. 自治医科大学看護学部紀要, 1;69-77, 2003.

19) 聖母子短期大学同窓会員 (塚越フミエ): シスター寺本松野－その看護と教育－. 日本看護協会出版会 (東京), 17-25, 2003.

20) 中村美鈴, 川崎佳代子: 疾患理解とケアプランのための看護過程セミナー2, 子宮筋腫患者の看護. ナーシングカレッジ, 7(10);194-207, 2003.

21) 中村美鈴: 胃切除患者術後の栄養状態の回復状況. アルファクラブ, 230;15-16, 2003.

22) 竹田津文俊, 中村美鈴: 間質性腎炎 電解質異常による病態. 月刊ナーシング, 23(7);100-107, 2003.

23) 中村美鈴: トリアージのための重点的アセスメント. 臨牀看護, 29(14);2186-2190, 2003.

24) 中村美鈴: 手術看護と手術中の看護. 月刊かんごきろく, 13(9);39-45, 2003.

25) 千葉京子, 中村美鈴, 長江弘子: 大腿骨頸部骨折術後高齢者が「生活の折り合い」に向かう心理的過程 退院1週間前から退院1ヵ月後までの経過. 日本看護研究学会雑誌, 26(5);73-86, 2003.

26) 野口美和子 (監), 塚越フミエ (編): 事例で学ぶ成人看護学/1 呼吸機能障害をもつ成人の看護／循環機能障害をもつ成人の看護. メヂカルフレンド社 (東京), 2003.

27) 野口美和子 (監), 塚越フミエ, 小島善和 (編): 事例で学ぶ成人看護学/2 消化・吸収機能障害をもつ成人の看護／栄養代謝機能障害をもつ成人の看護. メヂカルフレンド社 (東京), 2003.

28) 野口美和子 (監), 塚越フミエ, 大西和子 (編): 事例で学ぶ成人看護学/3 内部環境調節機能障害をもつ成人の看護／身体防御機能障害をもつ成人の看護. メヂカルフレンド社 (東京), 2003.

29) 中村美鈴: 大動脈解離患者の看護. 事例で学ぶ成人看護学/1 呼吸機能障害をもつ成人の看護／循環機能障害をもつ成人の看護 (塚越フミエ編), メヂカルフレンド社 (東京), 92-109, 2003.

30) 中村美鈴: 食道がん患者の看護. 事例で学ぶ成人看護学/2 消化・吸収機能障害をもつ成人の看護／栄養代謝機能障害をもつ成人の看護 (塚越フミエ, 小島善和編), メヂカルフレンド社 (東京), 15-34, 2003.

31) 塚越フミエ: 脳梗塞患者の看護. 事例で学ぶ成人看護学/4 脳・神経機能障害をもつ成人の看護／感覚機能障害をもつ成人の看護 (塚越フミエ編). メヂカルフレンド社 (東京), 6-25, 2003.

32) 塚越フミエ: 脊髄小脳変性症 (SCD) 患者の看護. 事例で学ぶ成人看護学/4 脳・神経機能障害をもつ成人の看護／感覚機能障害をもつ成人の看護 (塚越フミエ編). メヂカルフレンド社 (東京), 59-70, 2003.

33) 村上礼子: 気管支喘息患者の看護. 事例で学ぶ成人看護学/1 呼吸機能障害をもつ成人の看護／循環機能障害をもつ成人の看護 (塚越フミエ編). メヂカルフレンド社 (東京), 34-47, 2003.

34) 水野照美: 消化・吸収機能障害の担い手と障

害の発生。事例で学ぶ成人看護学/2 消化・吸収機能障害をもつ成人の看護/栄養代謝機能障害をもつ成人の看護 (塚越フミエ, 小島善和編)。メヂカルフレンド社 (東京), 2-4, 2003.

35) 水野照美: 舌癌患者の看護。事例で学ぶ成人看護学/2 消化・吸収機能障害をもつ成人の看護/栄養代謝機能障害をもつ成人の看護 (塚越フミエ, 小島善和編)。メヂカルフレンド社 (東京), 5-14, 2003.

36) 水野照美: 胃癌患者の看護。事例で学ぶ成人看護学/2 消化・吸収機能障害をもつ成人の看護/栄養代謝機能障害をもつ成人の看護 (塚越フミエ, 小島善和編)。メヂカルフレンド社 (東京), 35-49, 2003.

37) 山本洋子: クモ膜下出血患者の看護。事例で学ぶ成人看護学/4 脳・神経機能障害をもつ成人の看護/感覚機能障害をもつ成人の看護 (塚越フミエ編)。メヂカルフレンド社 (東京), 26-44, 2003.

38) 山本洋子: 脳腫瘍患者の看護。事例で学ぶ成人看護学/4 脳・神経機能障害をもつ成人の看護/感覚機能障害をもつ成人の看護 (塚越フミエ編)。メヂカルフレンド社 (東京), 44-58, 2003.

39) 村上礼子: 感覚機能障害をもつ成人の看護。事例で学ぶ成人看護学/4 脳・神経機能障害をもつ成人の看護/感覚機能障害をもつ成人の看護 (塚越フミエ編)。メヂカルフレンド社 (東京), 72-124, 2003.

40) 小林貴子, 小長谷百恵, 小平京子, 井上智恵, 松田悦子, 伊藤ひろみ, 土屋陽子, 患者教育研究会: 「看護実践モデル」における「とっかかり/手がかり言動とその直感的解釈」。看護研究, 36(3);13-23, 2003.

#### (4) その他

1) 中村美鈴: 白百合女子大学女性とライフコース, 医療と家族, 白百合女子大学, 2003.

2) 中村美鈴: 日本在宅看護協和会, 乳がんの自己検診と予防, 東京在宅協和会会館, 2003.

3) 高村寿子, 中村美鈴: 栃木県庁健康増進課主催リーフレット作成委員会の指導者担当, 2003.

4) 水野照美: 血液・造血器疾患患者とのコミュニケーション。ナーシングカレッジ, 7(16);63-68, 2003.

## 老年看護学

### (1) 原著論文

1) 高木初子: 老年看護学において学生が身につけた実践知としての看護援助能力ー意識的な振り返りを通してー。自治医科大学看護学部紀要1;55-67, 2003.

2) 小田切陽一, 佐藤悦子, 水戸美津子, 流石ゆり子, 高木初子, 永盛るみ子, 田中久恵, 内田博之, 藤江千歳, 山本美代子, 小沢美智子, 丸山久美子, 風間喜美子: 山梨県の在宅要援護高齢者の分布と人口密度からみた関連要因の地域特徴。山梨県立看護大学紀要 5;1-10, 2003.

### (2) 学会発表

1) 神山幸枝, 高木初子, 内海香子, 余語琢磨, 篠澤悦子, 野口美和子: 高齢脳血管障害患者のセルフケア。第38回日本老年医学会関東甲信越地方会, 宇都宮。2003年9月20日。(第38回日本老年医学会関東甲信越地方会プログラム 12, 2003)

2) 黒田久美子, 横山のぶ子, 鳥飼紀子, 内海香子, 清水安子: A病院における虚血性心疾患患者のニーズの実態について。第8回日本糖尿病教育・看護学会学術集会, 新潟。2003年9月28日。(日本糖尿病教育・看護学会誌 7(suppl.);200, 2003)

3) 清水安子, 内海香子, 野口美和子, 黒田久美子, 横山のぶ子, 鳥飼紀子: A病院糖尿病外来における高齢者インスリン使用者のニーズの実態について。第8回日本糖尿病教育・看護学会学術集会, 新潟。2003年9月27日。(日本糖尿病教育・看護学会誌 7(suppl.);182, 2003)

4) 内海香子, 野口美和子, 清水安子, 湯浅美千代, 黒田久美子, 横山のぶ子, 鳥飼紀子, 大神ヨシ子: 高齢糖尿病患者のインスリン使用に伴う生活上の問題状況。第34回日本看護学会ー老年看護ー, 宮崎。2003年9月18日。(第34回日本看護学会抄録集 104, 2003)

### (3) 著書・総説

1) 神山幸枝, 日向朝子: 性・生殖機能障害をもつ成人の看護 第1章 性・生殖機能障害と日常生活。新体系看護学25 成人看護学⑥ 運動機能障害をもつ成人の看護/性・生殖機能障害をもつ成人の看護 (野口美和子編)。メヂカルフレンド

社 (東京), 176 - 201, 2003.

2) 神山幸枝, 日向朝子: 運動機能障害をもつ成人の看護 第4章 性・生殖機能障害をもつ患者の看護. 新体系看護学25 成人看護学⑥ 運動機能障害をもつ成人の看護/性・生殖機能障害をもつ成人の看護 (野口美和子編). メヂカルフレンド社 (東京), 268 - 295, 2003.

3) 水戸美津子, 高木初子: 老年看護学における展開. 看護事故予防学 (土屋八千代, 山田静子, 鈴木俊夫編). 中山書店, 79-90, 2003.

4) 塚越フミエ, 高木初子: 脳・神経機能障害をもつ成人の看護 第2章 脳・神経機能障害の把握と看護. 新体系看護学24 成人看護学⑤ 脳・神経機能障害をもつ成人の看護/感覚機能障害をもつ成人の看護 (野口美和子編). メヂカルフレンド社 (東京), 34-73, 2003.

5) 鈴木久美子, 塚越フミエ, 内海香子, 小曾根佳枝, 弘田智香: 脳・神経機能障害をもつ成人の看護 第4章 脳・神経機能障害をもつ患者の看護. 新体系看護学24 成人看護学⑤ 脳・神経機能障害をもつ成人の看護/感覚機能障害をもつ成人の看護 (野口美和子編). メヂカルフレンド社 (東京), 100-149, 2003.

6) 高木初子: 脳神経疾患をもつ患者の観察. 成人内科 (宮崎和子監, 千田敏恵, 小野寺綾子編). 中央法規, 10-23, 87-107, 2003.

7) 竹田津文俊, 高木初子: 病態生理 内分泌疾患Ⅰ さまざまなホルモンとその働き. 月刊ナーシング, 23(1);100-110, 2003.

8) 竹田津文俊, 高木初子: 病態生理 内分泌疾患Ⅱ 視床下部疾患, 下垂体疾患. 月刊ナーシング, 23(2);88-95, 2003.

9) 神山幸枝, 内海香子, 茂呂悦子, 渡井 恵, 岸恵美子, 山田恵子, 友竹千恵, 島田由美子, 小松崎香: 呼吸機能障害をもつ成人の看護. 新体系看護学21 成人看護学② 呼吸機能障害をもつ成人の看護/循環機能障害をもつ成人の看護 (野口美和子編). メヂカルフレンド社 (東京), 4-116, 2003.

10) 内海香子, 宮田直美, 大畑紀恵: 栄養代謝機能障害をもつ成人の看護. 新体系看護学22 成人看護学③ 消化・吸収代謝機能障害をもつ成人の看護/栄養代謝機能障害をもつ成人の看護 (野口美和子編). メヂカルフレンド社 (東京), 166-287, 2003.

11) 友竹千恵, 内海香子, 鈴木久美子: pH調節機能障害をもつ成人の看護 第3章 pH調節機能障害の検査・治療に伴う看護. 新体系看護学23 成人看護学④ 内部環境調節機能障害をもつ成人の看護/身体防御機能障害をもつ成人の看護 (野口美和子編). メヂカルフレンド社 (東京), 80-104, 2003.

12) 内海香子: 血糖調節機能障害をもつ成人の看護 第3章 血糖調節機能障害の検査・治療に伴う看護. 新体系看護学23 成人看護学④ 内部環境調節機能障害をもつ成人の看護/身体防御機能障害をもつ成人の看護 (野口美和子編). メヂカルフレンド社 (東京), 149-183, 2003.

13) 島田由美子, 内海香子, 鈴木典子, 小松崎香, 小貫栄子: 身体防御機能障害をもつ成人の看護 第3章 身体防御機能障害の検査・治療に伴う看護. 新体系看護学23 成人看護学④ 内部環境調節機能障害をもつ成人の看護/身体防御機能障害をもつ成人の看護 (野口美和子編). メヂカルフレンド社 (東京), 273-318, 2003.

14) 島田由美子, 内海香子, 鈴木典子, 小松崎香, 小貫栄子, 鈴木久美子, 高岡恵美子: 身体防御機能障害をもつ成人の看護 第4章 身体防御機能障害をもつ患者の看護. 新体系看護学23 成人看護学④ 内部環境調節機能障害をもつ成人の看護/身体防御機能障害をもつ成人の看護 (野口美和子編). メヂカルフレンド社 (東京), 320-359, 2003.

15) 小平京子, 内海香子, 島田由美子, 大柴幸子, 軽部真粧美: 運動機能障害をもつ成人の看護. 新体系看護学25 成人看護学⑥ 運動機能障害をもつ成人の看護/性・生殖機能障害をもつ成人の看護 (野口美和子編). メヂカルフレンド社 (東京), 4-171, 2003.

16) 高木初子: 大腸癌患者の看護. 事例で学ぶ成人看護学/2 消化・吸収機能障害をもつ成人の看護/栄養代謝機能障害をもつ成人の看護 (塚越フミエ, 小島善和編). メヂカルフレンド社 (東京), 47-61, 2003.

#### (4) その他

1) 高木初子: 要点を絞って図を展開するコツ. コツを押さえて自由自在に関連図を書く. ナーシングカレッジ, 7(18);98-99, 2003.

2) 内海香子, 野口美和子, 清水安子, 湯浅美千

代, 黒田久美子, 横山のぶ子, 鳥飼紀子, 大神ヨシ子: 高齢糖尿病患者のインスリン使用に伴う生活上の問題状況. 第34回日本看護学会論文集-老年看護-, 135-137, 2003.

# 資 料

## 2003年度（平成15年度）年譜

|       |                   |              |
|-------|-------------------|--------------|
| 平成15年 | 4月4日（金）           | 自治医科大学入学式    |
|       | 4月7日（月）           | 新入生オリエンテーション |
|       | 4月8日（火）           | 前期授業開始       |
|       | 5月14日（水）          | 自治医科大学創立記念日  |
|       | 7月23日（水）～25日（金）   | 前期定期試験       |
|       | 7月28日（月）～9月28日（日） | 夏季休業         |
|       | 9月8日（月）～10日（水）    | 前期再試験        |
|       | 10月10日（金）～12日（日）  | 学園祭（第32回薬師祭） |
|       | 12月24日（水）～1月4日（日） | 冬季休業         |
| 平成16年 | 2月24日（火）～27日（金）   | 後期定期試験       |
|       | 3月15日（月）～17日（水）   | 後期再試験        |
|       | 3月23日（火）～31日（水）   | 春季休業         |

## 自治医科大学看護学部の概況 （平成16年3月31日現在）

|                  |      |
|------------------|------|
| 1. 教 員 数         | 40名  |
| 2. 学 生 数         | 197名 |
| 3年生（平成14年4月1日入学） | 98名  |
| 2年生（平成15年4月1日入学） | 99名  |

## 教職員名簿

### 1. 教員

| 職名  | 氏 名       | 主要担当科目    |
|-----|-----------|-----------|
| 学部長 | 野 口 美和子   |           |
| 教 授 | 川 崎 佳代子   | 母 性 看 護 学 |
| 教 授 | 川 口 千 鶴   | 小 児 看 護 学 |
| 教 授 | 篠 澤 侃 子   | 地 域 看 護 学 |
| 教 授 | 高 村 寿 子   | 健 康 教 育 論 |
| 教 授 | 竹 田 俊 明   | 人体の構造と機能  |
| 教 授 | 竹田津 文 俊   | 疾 病 と 病 態 |
| 教 授 | 永 井 優 子   | 精 神 看 護 学 |
| 教 授 | 永 嶋 フミエ   | 成 人 看 護 学 |
| 教 授 | 成 田 伸     | 母 性 看 護 学 |
| 教 授 | 松 田 たみ子   | 基 礎 看 護 学 |
| 教 授 | 渡 邊 亮 一   | 保健医療情報学   |
| 助教授 | 神 山 幸 枝   | 老 年 看 護 学 |
| 助教授 | 小 平 京 子   | 成 人 看 護 学 |
| 助教授 | 小 西 岡 和 代 | 精 神 看 護 学 |
| 助教授 | 春 山 早 苗   | 地 域 看 護 学 |
| 講 師 | 朝 野 春 美   | 小 児 看 護 学 |
| 講 師 | 大久保 祐 子   | 基 礎 看 護 学 |
| 講 師 | 大 原 良 子   | 母 性 看 護 学 |
| 講 師 | 加 藤 晶 子   | 小 児 看 護 学 |
| 講 師 | 岸 恵美子     | 地 域 看 護 学 |
| 講 師 | 里 光 やよい   | 基 礎 看 護 学 |
| 講 師 | 曾我部 美恵子   | 母 性 看 護 学 |
| 講 師 | 高 木 初 子   | 老 年 看 護 学 |
| 講 師 | 中 村 美 鈴   | 成 人 看 護 学 |
| 講 師 | 早 川 有 子   | 母 性 看 護 学 |
| 講 師 | 水 野 照 美   | 成 人 看 護 学 |
| 講 師 | 山 本 洋 子   | 成 人 看 護 学 |
| 講 師 | 余 語 琢 磨   | 文 化 人 類 学 |
| 助 手 | 内 海 香 子   | 老 年 看 護 学 |
| 助 手 | 亀 田 真 美   | 基 礎 看 護 学 |
| 助 手 | 菅 野 こずえ   | 基 礎 看 護 学 |
| 助 手 | 鈴 木 久美子   | 地 域 看 護 学 |
| 助 手 | 関 澄 子     | 精 神 看 護 学 |
| 助 手 | 多 田 敦 子   | 小 児 看 護 学 |
| 助 手 | 田 中 幸 子   | 地 域 看 護 学 |
| 助 手 | 友 竹 千 恵   | 成 人 看 護 学 |
| 助 手 | 豊 田 省 子   | 基 礎 看 護 学 |
| 助 手 | 橋 本 かおり   | 母 性 看 護 学 |
| 助 手 | 日 向 朝 子   | 精 神 看 護 学 |
| 助 手 | 村 上 礼 子   | 成 人 看 護 学 |

### 2. 事務部

| 職 名   | 氏 名     |
|-------|---------|
| 事務部長  | 小 林 眞   |
| 事務副部長 | 塚 原 則 男 |

#### (看護総務課)

|      |         |
|------|---------|
| 課 長  | 藍 原 孝 樹 |
| 課長補佐 | 佐 藤 博   |
| 主任主事 | 石 倭 ユリ子 |
| 主 事  | 松 本 則 子 |
| 主 事  | 川 村 仁 美 |

#### (看護学務課)

|      |         |
|------|---------|
| 課 長  | 藍 原 孝 樹 |
| 参 事  | 菅 俊 夫   |
| 係 長  | 安 島 幸 子 |
| 主任主事 | 笠 倉 昇   |
| 主 事  | 松 本 恵美子 |
| 主 事  | 宮 田 弘 美 |

(各職名ごとの50音順)

## 編集後記

本号は、2003年4月1日から2004年3月31日までの1年間の自治医科大学看護学部の活動の概要をまとめたものである。

本号では、特別報告として、野口美和子学部長に、文部科学省や厚生労働省に設置された看護に関する各種委員会の報告を土台にして、21世紀の望ましい看護ケアのあり方やそのための看護教育のあり方、特に看護実践能力の育成についてご執筆いただいた。自治医科大学看護学部では、すでに2007年度以降のカリキュラムの検討を始めているが、この検討などにたいへん有意義なものと思われる。

また、健康教育学の高村寿子教授に、2003年8月に実施されたピアカウンセリングの研修旅行についてご執筆いただいた。この研修旅行は、夏期休暇中の課外学習のひとつとして位置づけられ、2004年度も引き続き実施されているが、看護学部の学生が海外でいかなることを体験し、学習しているのかを知る上で有益なものである。課外学習としては、これ以外にも、へき地看護の体験学習などが行われており、いずれかの機会にご紹介いただく予定である。

本号は、当初は2004年12月末に発行する予定であったが、諸般の事情により約3ヵ月遅れの2005年3月末発行となってしまった。これは、ひとえに編集委員会の責任であり、関係各位に深くお詫び申し上げる次第である。

(編集委員長：渡邊亮一)

---

### 年報編集委員会

|      |                             |
|------|-----------------------------|
| 委員長  | 渡邊 亮一 (自治医科大学 看護学部 保健医療情報学) |
| 委員   | 竹田津文俊 (自治医科大学 看護学部 疾病と病態)   |
|      | 成田 伸 (自治医科大学 看護学部 母性看護学)    |
|      | 春山 早苗 (自治医科大学 看護学部 地域看護学)   |
|      | 水野 照美 (自治医科大学 看護学部 成人看護学)   |
| 編集担当 | 松本 則子 (自治医科大学 大学事務部 看護総務課)  |

---

## 自治医科大学看護学部年報 第2号

平成17（2004）年3月25日発行

|       |                                                           |
|-------|-----------------------------------------------------------|
| 発行者   | 自治医科大学看護学部<br>学部長 野口 美和子                                  |
| 編集責任者 | 自治医科大学看護学部年報編集委員会<br>委員長 渡邊 亮一                            |
| 発行所   | 自治医科大学看護学部<br>栃木県河内郡南河内町薬師寺3311-159<br>電話 0285（44）2111(代) |
| 印刷所   | (株)松井ピ・テ・オ・印刷<br>栃木県宇都宮市陽東町5-9-21<br>電話 028（662）2511(代)   |